

# 誘惑と厄祓いの身体

— マカオのカジノの内外における「性的」女性をめぐる —

劉 振業\*

本稿では、マカオのカジノ内外において性的存在とみなされるホステスと売春婦を事例として、彼女たちの「生の技法」に見られる誘惑と厄祓いとしての身体について考察する。ホステスは、カジノの内において金持ちギャンブラーの誘致やリピート率を上げるための職種であり、売春婦は、カジノの外においてギャンブラーがギャンブルにおける不運を取り祓うための「容器」とされている。彼女たちの身体は、男性ギャンブラー優位のマカオカジノ業における「性的」存在だとマカオの人々の間に見なされるものである。一方で、既存の研究は主に、アメリカにおけるカジノの女性従業員が受けるカジノ側からの監視と規制に対する抵抗の実践をめぐる考察であり、「性的」存在とされる女性の身体による異なる実践の視点が欠けている。

筆者は2018年8月から1年間にわたるマカオでのフィールドワークを通じて、マカオの「性的」女性の実態の一部を観察してきた。既存の研究や新聞記事において、彼女たちの身体は過度に「性的」と表象されるがゆえに、研究や報道から排除されがちな存在である。大量の男性ギャンブラーによって発展を遂げるマカオのカジノ業において、性的快楽と厄祓いという二重の意味を持つ彼女たちの「性的身体」は、さらなる集客のために不可欠であるとされる。本稿では、ホステスと売春婦の実践を記述し、そうした「性的」身体の可能性を考察する。本稿は、田中雅一（2018）の誘惑論を援用し、その視点を持って「性的」身体を分析する。誘惑において特徴的であるのは、主客の転換、身体の偶発性、自他の融解などが挙げられる。マカオにおけるホステスと売春婦の事例を通じて、「性的」女性であることの実態を把握し、その身体性を検討することによって、「抵抗の物語」と表象されてしまう女性問題と別の、「誘惑の物語」を見出す。そこからマカオ社会のありかたを解明し、さらには「誘惑の民族誌」の可能性を提供することが本稿の目的である。

## キーワード

誘惑、女性、性的身体、マカオ、カジノ

## 目次

- |                         |                              |
|-------------------------|------------------------------|
| I はじめに                  | 3 ギャンブラーを誘惑する身体              |
| 1 「マカオではワンナイトの関係が存在しない」 | IV カジノの外にいる厄祓いの女性——売春婦       |
| 2 先行研究のレビュー             | 1 遍在する性産業の場所                 |
| 3 誘惑の民族誌の可能性            | 2 売春婦になる                     |
| 4 本稿の構成と特徴              | 3 売春婦を管理する鶏頭                 |
| II 調査地概況                | 4 厄祓いの容器としての身体               |
| 1 マカオ概況とカジノの発展史         | V 終わりに                       |
| 2 カジノスタッフの構成におけるホスト部    | 1 格差という重層的な構造的暴力で生まれるマカオの性産業 |
| 3 「旧沙圏」と「新沙圏」           | 2 男性ギャンブラー優位性の構造を改革できなかった誘惑  |
| III カジノ内の誘惑する女性——ホステス   |                              |
| 1 金持ちをもてなすホスト部門         |                              |
| 2 女性ディーラーから見るホステス       |                              |

\* 京都大学大学院

## I はじめに

### 1 「マカオではワンナイトの関係が存在しない」

ポルトガル領の小さな漁村であったマカオは、こんにち「東方のラスベガス」と呼ばれるほどのカジノシティとして世界に知れ渡っている。マカオのカジノ数は現在のところラスベガスに劣っているものの、売上はすでにラスベガスの3倍近くに達したのである(大川 2011: 179)。その背景には、カジノコンセッション<sup>1</sup>の国際入札がもたらす激しい競争や中国大陸(以下、大陸)の急速な経済発展などが挙げられる。膨大な人口と急速発展した経済を抱える中国社会だが、その中で唯一カジノが合法であるマカオは、賭博好きな人々にとって不確実性のスリルを存分に味わうことができる夢のような場所である。

カジノの発展とともに、ギャンブルに付き物と言われる性産業も盛況を見せている。マカオでは、ポルトガル領であった1887年に性産業が合法化された。性産業が行われる場所は「娼寮」<sup>2</sup>と呼ばれ、広州の若い女性がマカオまで誘拐された記述が今に伝わっている(陳 2018: 8)。マカオの性産業は1930年代に全盛期を迎え、1938～1940年の調査によると、娼寮は120軒以上、性産業従事者は1500人以上にのぼったとされる(史 2010: 20)。1980年代になると、性産業従事者の多くは香港の女性と東南アジアからの女性となるが、2002年のカジノコンセッション開放後から現在は大陸出身の女性がメインとなった。IV章に詳述するが、現在のマカオの性産業には大きな変動が起こったのである。現在のマカオにおけるギャンブルと性の関係は、ネット記事の「澳門沒有一夜情(マカオではワンナイトの関係が存在しない)」にその一端が窺われる。以下はその引用である<sup>3</sup>(傍点筆者)。

「『マカオでは、金の腕時計がないとダメなんで

す。他の人に見下されるわけではなく、他の人から見えないんです』…中略…西洋の女性、大陸トップクラスのモデル、東南アジアの夢追い人、日韓の名門のお嬢さまなど…中略…多くの人は、マカオはこんなに多くの美人が集まるのだから、さぞ出会いも多いだろうと思っています。しかし、それは断じて違います。マカオではワンナイトの関係が存在せず、関係を持つためにはchip<sup>4</sup>と香港ドルに基づかないといけません。…中略…ここは金持ちのパラダイスであり、あなたが無一文なら、貧乏小僧が女性富豪によじのぼるようなメルヘンは絶対起こりません。…以下略…」

記事は、マカオのギャンブルと性について、最も重要なカネをめぐる関係について述べている。また、この記事の「語り手」の視点は男性側のものであり、「男性=金銭的ギャンブラー」、「女性=性的身体」という構図が読み取れる。「性的」身体を持つ女性は金を持つギャンブラーを見定めているとされ、金を持っていない男性はカジノでは女性の目に見えてすらいないのである。

マカオにおける「性的」女性はカジノと切っても切れない関係であるものの、このような女性を対象とした研究はあまり見られない。本稿は、マカオにおける「性的」女性とされるホステス<sup>5</sup>と売春婦<sup>6</sup>を対象に、彼女たちの身体は男性ギャンブラーやギャンブル、カジノ、そしてマカオ社会などと、どのような関係性があり、どのように表象されているかについて考察をりたい。

## 2 先行研究のレビュー

### (1) 性産業に関する研究

まず、性産業に関する研究を整理したい。性産業における売買春、セックスワークは主に「性の商品化」

1 カジノコンセッション (casino concession) とは、マカオという特定の地理的範囲と、カジノという事業範囲において、事業者が免許や契約によって独占的な営業権を与えられたうえで行われるカジノ営業の方式を指す。

2 本稿では、マカオの日常会話で使われる言語が中国語の標準語(マンダリン)ではなく、広東語であるため、一部大陸ギャンブラーの用語や人名を除き、現地語の読み方表記はほぼ広東語の読み方である。

3 <https://kknews.cc/entertainment/ejlpmmq.html> 毎日頭條、2019年3月13日。

4 本稿では、同じ「チップ」である tip (人にあげる祝儀) と chip (カジノにおける現金のトークン) の混同を避けるため、この二つの言葉は英語で表記する。

5 ホステスは、マカオカジノにおいて女公関と呼ばれ、ホスト部門は公関部と呼ばれる。本稿では、以下「ホステス」「ホスト部門」と統一する。

6 本稿では、「性工作者(セックスワーカー)」ではなく、あえて「鶏(売春婦)」という用語を使う理由として、女性の自立などを意味する一仕事というニュートラルのニュアンスを含む「セックスワーカー」ではなく、「売春婦」におけるジェンダー間の不均衡に置かれるカジノ外の「性的」女性に含まれる軽蔑的な意味合いを捨象したくないためである。

をめぐって展開されるものである<sup>7</sup>。「性の商品化」とは、セックスやそれに関連する性的行為が商品として売買の対象とされることを指す（江原 2008: 132）。「性の商品化」の問題は、買春側としての男性と売春側としての女性という、「男性の優位性」が前提とされており、男性による支配というジェンダー間の不均衡が見られることにある。本稿は、マカオにおける「男性ギャンブラーの優位性」が前提とされるカジノ内外において、「性的」女性とギャンブラー（または買春客）との関係性を考察するため、ここでは売春婦と買春客の関係性を対象とした熊田（2017）と田川（2019）の研究を取り上げたい。

熊田（2017）は、東京都心におけるデリバリーヘルスと呼ばれる無店舗型性風俗店で働く「おんなのこ」を対象に、彼女たちを中心とする性風俗世界における人々の有機的関係性の構築実践を考察した。その中で、熊田は「おんなのこ」と客の間での「プレイ」が、生殖という義務的行為とは区別される「遊び」としての性行為であると指摘している<sup>8</sup>。このような「遊び」としての性行為は、「おんなのこ」が客の要望を否定しないと同時に、客に合わせて演技することで成立し、その成立の下では「おんなのこ」と客の間でのメタ・メッセージの応酬が見られる。そして、「おんなのこ」は客との間で「遊び」と「本気」の境界線で「遊ぶ」。そうした複雑なやり取りを通して関係性が紡がれるプロセスそのものがY店で提供される「プレイ」なのだ」と熊田は述べた（熊田 2017: 72-73）。

田川（2019）は、フィリピンのマニラ首都圏における日系カラオケパブ（JKTV）の事例から、「サービス提供者」としてのフィリピン人女性と、「顧客」としての日本人男性の間で、金銭を介した交換関係における親密性を検討した。JKTVにおけるサービス提供は、顧客男性の射精を促すサービスを含まず、売買春のグレーゾーンに位置付けられている。田川は、JKTVにおける性的関心を含む好意を持った相手との「疑似恋愛」の相互的な働きかけのプロセスを、「性の商品化」と「セックスワーク」と区別した。そのプロセスで支払われる顧客の金銭は、共通性も共有性も持たない両者の関係性の文脈を代替し、「サービス提供者」と

「顧客」という「役割」の間で見られる「文脈限定的な親密性」を形成したと主張した（田川 2019: 117-119）。

上記の二つの性産業における売春側としての女性と、買春側としての男性の関係性をめぐる研究は、男性による支配というジェンダー間の不均衡の前提とは別の様相を示した。女性を主な対象とするジェンダーおよびフェミニズム研究では、性産業に従事する女性の解放を主張する考察が多く、性産業に従事する女性の経験を尊重する議論はあまり見られない。この二つの研究は、解放と廃止のような一面的主張を避け、性産業に従事する女性たちの実践と、彼女たちと客との関係性を記述し、存続／廃止のような対立の再生産に陥る循環を防いだ。

しかし、筆者はマカオのカジノ内外における「性的」女性を対象とする調査を通じて、客（ギャンブラー）との関係性は、熊田の「遊び」と田川の「文脈限定的な親密性」とも、異なる様相を見せていると考えている。熊田の「遊び」としての性行為は、生殖を一切念頭に置かない性行為を客と交わしているが、客が料金を支払って「遊び」相手となる「おんなのこ」と出会う時、「おんなのこ」はすでに客に「選ばれ」ており、客を「遊ばせる」義務が生じる。「おんなのこ」にとっての誘惑は、「選ばれ」てから「遊ばせる」義務における一つ的手段に過ぎない。これに対して、マカオにおけるホステスは、「おんなのこ」と同様に一定のノルマを達成する義務を持っているが、金持ちのギャンブラー（以下、金持ちギャンブラー）を「捕獲する」ために、身体におけるあらゆるものを活用し、金持ちギャンブラーを「選ぶ」のである。ホステスにとって誘惑は、金持ちギャンブラーを「選ぶ」かつ「狩る」プロセスにおける重要な発端である。

さらに、田川の「文脈限定的な親密性」において、性行為を含まない「官能労働」が「性産業」に入るかどうかという疑問はさておき<sup>9</sup>、「サービス提供者」と「顧客」の間で関係性の構築を介する金銭は、「疑似恋愛」に隠された「平等の関係性」のもとで、関係構築の前提的手段としてしか現れない。しかし、本稿で見られるマカオにおける売春婦の身体は、客（ギャンブ

7 本稿では紙幅のため詳しく取り上げないが、セックスワーク・スタディーズに関する議論の整理は、SWASH（2018）を参照されたい。

8 「遊び」としての性行為は、熊田は以下のように定義する。「生殖が義務化したとき、それは目的を達成するための手段としての性格を帯びる。それに対して、生殖を一切念頭に置かない性行為は、純粋な『遊び』となりうるからだ」（熊田 2017: 53）。

9 実際、田川の調査したJKTVにおいても性行為が行われることもあると報告している（田川 2019: 101）。

ラー)<sup>10</sup>と「疑似恋愛」の関係を結ぶものではなく、客(ギャンブラー)の厄祓いの容器ととらえられる「暴力的関係性」を構築するものである。関係構築の手段でも目的でもある金銭は、マカオにおける売春婦と客(ギャンブラー)との間で暴力性を含む「不平等の関係性」を暴くものであると思っている。

## (2) カジノにおける女性に関する研究

そして、カジノにおける女性に関する研究を簡単に整理したい。「ギャンブル=男性的なもの」という歴史的表象の前提のもとで、ギャンブル合法化による女性の参加が大幅に増え、カジノにおける様々な女性を対象とした研究が脚光を浴びてきた。最初に注目を集めたのは、男性ギャンブラーと異なる女性のギャンブラー行動である<sup>11</sup>。その中で、カジノにおける女性ギャンブラー以外の女性を対象とした研究も登場した。本稿で主に注目するのは、監視(surveillance)と規制(regulation)を受けるカジノスタッフの女性の抵抗(resistance)をめぐる民族誌的叙述を使った人類学的研究である。

ベヤード・デ・ヴォロー (Bayard de Volo) (2003) は、ラスベガスの三つのカジノの調査を通じて、カジノにおけるカクテルウェイトレスを対象に、カジノフロアにおける監視メカニズム、tipシステム、性別化される環境 (sexualized environment)<sup>12</sup>に対する「基底政治 (infrapolitics)」<sup>13</sup>としての実践から現れる抵抗について論じた。上司のマネージャー、同僚、客は、監視、ジェンダーヘゲモニー、「経済的刺激 (financial incentives)」という権力関係を持ってカクテルウェイトレスの外見と行動を統制しようとしている。しか

し、ベヤード・デ・ヴォローの調査においてカクテルウェイトレスは客からセクハラを受けることが少なく、一部の権力関係は実際、それほど作動しているわけではない。ところが、「男性主体的」なジェンダーヘゲモニーは確実に存在し、カクテルウェイトレスは自分の身体をより露出的な制服に似合わせるようにし、ハイヒールの着用と美容管理基準を厳守すべきであるという「身体改造」を行っているのである。

このような身体に対する監視と規制に対して、カクテルウェイトレスはカジノ側の利益と矛盾する「個人的自由選択 (individual free choice)」を主張し、tipの減少をもたらすサイダー入りのセルフ冷蔵庫の設置<sup>14</sup>や制服の露出度に対する抗議を行ったり、ハイヒール着用が妊婦や年を取った女性にもたらす健康被害を訴えたりすることが見られる。「組織的抵抗 (organized resistance)」の欠如はカクテルウェイトレスが抵抗しないことを意味するのではなく、「基底政治」に潜む権力関係やジェンダーヘゲモニーを変える可能性はそのようなカクテルウェイトレスらの「非組織的抵抗」に見出されるという指摘がある (Bayard de Volo 2003: 372-373)。

ジョーンズとチャンドラー (Jones & Chandler) (2007) は、ネバダのカジノにおける3人の女性労働者の「身体ストーリー (body stories)」<sup>15</sup>を記述することによって、カジノというグローバルな職場における女性労働者の身体に対するフーコー的な意味の「生権力 (biopower)」<sup>16</sup>を用いた統制、規律と訓練を明らかにした。3人の女性労働者は、それぞれ客室清掃員、ディーラー、カクテルウェイトレスを勤めており、それぞれの身体にカジノの管理部門による統制を感じ取

10 後述するように、ホステスの誘惑する対象は金持ちギャンブラーに限定する一方、金持ちギャンブラーと一般ギャンブラーを問わず、ギャンブラーは売春婦の「サービス」を利用することから、以降売春婦の相手と言及する場合、「客 (ギャンブラー)」という表記で統一する。

11 本稿では紙幅のため詳述しないが、以下の研究を参照されたい。(Tarras et al. 2000; Walker et al. 2005; LaPlante et al. 2006; Afifi et al. 2010)

12 性別化される環境 (sexualized environment) とは、性的活動 (sexual activity)、性的衣装 (sexy clothes)、性的行動 (sexual behavior) が目立つ環境である。主に男性に対して、性的魅力を持つ性的装飾とした女性を性的利用可能な存在に作り上げる環境を指す。

13 基底政治 (infrapolitics) とは、下層グループが用いた上層グループに気づかれぬ抵抗の戦略を指すスコット (Scott) が提唱した概念である (Scott 1990: 183)。また、「基底政治」という日本語訳は、吉田 (2003) を援用したものである。

14 カジノでは、バーカウンターに行って無料のドリンクを注文することができるが、客がテーブルゲームやマシンゲームの席から離れたくない場合、ウェーターやウェイトレスにドリンクを持ってこよう頼むことができる。マカオのカジノでは tip を渡す習慣が見られないが、ラスベガスのカジノではウェイトレスのトレイの上に tip を置く習慣があると見受けられる。そのため、客が近くにすぐ利用できるセルフ冷蔵庫の設置はカクテルウェイトレスの tip の減少をもたらすのである。

15 身体ストーリー (body stories) とは、女性自身の痛みのような健康状況、ドラッグとアルコールに対する抗争、そして女性の身体に対するカジノ側の酷使、というような身体の経験 (body experiences) の意味を指す (Jones & Chandler 2007: 155)。

16 フーコーの生権力 (biopower) をめぐって様々な解釈がなされているが、ジョーンズとチャンドラーが引用した意味では、「人間の身体から経済的効用を引き出し、政治的支配の一形態 (a form of domination that extracts economic utility from the human body while it renders it politically docile)」を指す (Jones & Chandler 2007: 150)。

ることができる。客室清掃員は膝、ディーラーは背中、カクテルウェイトレスは足、それぞれの女性労働者の「生物的身体」がカジノ側による監視と重労働によって過酷な損傷を受ける。しかし、このような「支配」はまだヘゲモニーには程遠いという主張もある (Jones & Chandler 2007: 160)。

また、彼女たちは身体的な抑制を受け入れるのではなく、キス・マイ・フット (kiss my foot) 運動<sup>17</sup>の参加など、創造的かつ破壊的な「抵抗の表現 (expression of resistance)」の「新興空間 (emergent space)」<sup>18</sup>を見つけた。彼女たちが行っている闘争は、サイパン島やインド、アメリカとメキシコの国境における抑圧される女性労働者の経歴と共に、グローバル経済の資本の力に対抗する「主体となった」団結の労働者の一部となっているのである (Jones & Chandler 2007: 160)。

以上の二つのカジノにおける女性労働者をめぐる研究は、カジノ側による女性労働者の身体への監視と規制を暴き出し、女性労働者による「抵抗の物語」を描き出した。グローバル資本の現場であるカジノの女性労働者の「主体的抵抗」を強調し、「基底政治」のような「非組織的抵抗」、また、キス・マイ・フット運動のような「組織的抵抗」を例に、抑圧される身体が起こす「抵抗の物語」を提示している。このような「抵抗の物語」で描かれる実践は、確かに女性の「主体的身体」の奪還につながるのである。

しかし、マカオのカジノにおける調査を通じて、筆者は「抵抗の物語」とは別の様相を見せる女性像を見出した。マカオのカジノでも、確かに「男性ギャンブラーの優位性」が認められるが、カジノの内外にいるホステスと売春婦は、男性ギャンブラーとの間に特殊な権力関係がある。彼女たちも、カジノ管理部門からある程度の監視と規制を受けるものの、「抵抗の物語」における「主体的身体」の奪還につながるような実践はさほど見受けられない。マカオのカジノにおけるホステスと売春婦の身体は、監視と規制をめぐる「抵抗の物語」よりも、誘惑と厄祓いをめぐる「誘惑の物語」としてとらえることができる。次節では、そうした誘惑の民族誌の可能性を検討したい。

### 3 誘惑の民族誌の可能性

文化人類学における誘惑論の可能性を提起したのは田中 (2018) である。誘惑は悪への誘い、性的な誘い、さらに物品への誘いなどに分けることができるが、田中は主として性的誘惑を念頭に考察を進めた。本稿も、この性的誘惑を主とした誘惑の概念を継承する。田中によると、「誘惑」という言葉に注目する意義は、主客の逆転と身体の重要性の二点に求められる。誘惑は自律性・自立性の喪失をもたらし、他者と関わることに認められる根源的な畏れ (傍点著者) である (田中 2018: 48-49)。

誘惑には、能動する主体と受動する客体との絶え間のない逆転が含まれている。こうした関係が繰り返されることで、「自他の相互転換」へ、最終的に「自他の融合」へと進むのである。「呼びかけ」によって「従属する主体」の生成に終わり、主客の逆転の不在と異なり、誘惑において誘惑する側は、誘惑される側が能動的に立ちふるまうことと引き換えに、受動的な存在となるのである (田中 2018: 49-50)。

そして、誘惑がきわめて身体的な行為であり、自身の意図で管理できないという事態が生じる。田中はこれを「身体の偶発性」と呼ぶ (田中 2018: 52)。また、誘惑とはオーラルな交渉でもあると指摘した。誘惑における声とは、言葉の媒体ではなく、「身体」なのである。誘惑は、身体の自律性・自立性を否定し、そこに居心地悪さを感じ、この居心地悪さにこそ新たな「人間=身体的存在」と「人間関係=共同性」の可能性を求めると田中は主張した (田中 2018: 52-53)。

誘惑は、エロスの世界に人を誘い、エロスの世界における自他の交わりは、近代社会における二元論的な主従の図式そのものに異議申し立てをする。主客の転換、身体の偶発性、自他の融解など、近代合理主義が批判してきた諸概念が濃縮された場所にこそ、エロスの世界が潜んでいる。その導き手となるのが誘惑と誘惑する身体、それに共鳴する身体なのでと田中は指摘する (田中 2018: 59-61)。

また、民族誌執筆の過程で「誘惑」経験が私的なものであると判断されて削除されることが多いと田中は

17 Kiss My Foot 運動は、2001年にラスベガスのカクテルウェイトレスが組織した運動であり、カジノ側による雇用者に対するハイヒール着用の強制を緩めることに成功した。

18 新興空間 (emergent space) とは、Sassen (2004) の政治的新興空間 (emergent spaces for politics) から援用した概念であり、マイノリティが新しい政治的アクターを形成し、様々な主張を行い、非公式 (informal) またはまだ公式化されていない (not-yet-formalized) 政治の形態を指す (Sassen 2004: 59)。

述べる。誘惑は身体やエロティックな世界と密接に関係しており、エロスの世界は、いくつかの例外を除いて無視されてきた。誘惑という視点から、身体やエロスをめぐる新たな文化人類学の構想が生まれるはずであると田中は主張した(田中 2018: 69-71)。

このように、近代合理主義批判の鍵となる諸概念が潜んでいるエロスの世界における誘惑の経験は、今までの人類学の中であまり論じられてこなかった。先に述べたように、カジノにおける女性の身体に関する先行研究は「抵抗の物語」を主としたものである。本稿で考察を行うホステスと売春婦は、自分の身体を用いてギャンブラーと交渉し、エロスの関係を築く実践を行う。そこでは、監視と規制によって迫害された「身体の主体性」の奪還の代わりに、身体を用いる「誘惑の物語」が見受けられる。しかし、田中は誘惑という関係性を理想化している。「誘惑の条件」を言及せず、さらに主客の逆転などの特徴は「成功の誘惑」にしか見られないという不足があると筆者は思っている。そのため、本稿は田中の「誘惑」の概念を援用しつつ、「能動的誘惑」のホステスと「受動的誘惑」の売春婦の事例を持って、誘惑の民族誌の可能性の一例として提示したいと思っている。

#### 4 本稿の構成と特徴

本稿の構成は以下の通りである。本章ではマカオのカジノにおける「性的」女性の身体の表象について問題提起し、先行研究であるアメリカのカジノにおける監視と規制を受ける女性の身体の「抵抗の物語」を整理し、そこで「誘惑の視点」の欠如を述べ、誘惑の民族誌の可能性を検討する。II章では、調査地概況を紹介し、ホステスと売春婦が置かれている環境を提示する。III章では、カジノの内における「性的」女性であるホステスを対象に、一般の男性ギャンブラーと女性ディーラー、ホステス自身の語りを紹介し、ホステスの「誘惑する身体」を解明する。IV章では、カジノの

外における「性的」女性である売春婦を対象に、マカオの性産業の概況、売春婦になるプロセスにおける仲介役と管理役である中間人ジョンガンヤンと鶏頭ガイタウ(後述)を紹介し、売春婦の「身体ストーリー」を持って、売春婦の「厄祓いの身体」の実相を記述する。最後のV章では、マカオのホステスと売春婦の全体状況を分析した上で、本稿で検討するカジノにおける「性的」女性の身体の「誘惑の物語」が、身体論と誘惑論にどのような可能性を持つか検討する<sup>19</sup>。

また、本稿の特徴は、「性的」女性の「身体ストーリー」を考察する際に、個人の語りを記述し分析することである。法律面と政策面のようなマクロの視点ではとらえきれない彼女たちの身体性を、彼女たちの語りを持って記述する必要がある。ホステスと売春婦の生を考察することによって、男性ギャンブラーと彼女たちの間の誘惑的関係性のみならず、マカオの性産業における重層的な構造的暴力もより明晰になるであろう。

## II 調査地概況

本章では、調査地概況について紹介する。まず、マカオの概況とカジノの発展史を紹介し、カジノシティになった経緯とギャンブルがマカオ社会において持つ影響力を簡単に述べる。そして、第2節と第3節は、本稿のIII章のホステスとIV章の売春婦それぞれに対応するカジノスタッフの構成と、売春婦の出没が最も多い沙圈サーフアンの概説を通して、カジノにおけるホステスの位置付けと、最も知名度の高いマカオ性産業の場所の変化について紹介する。

### 1 マカオ概況とカジノの発展史

マカオは一国二制度<sup>20</sup>のもとで高度な自治権を有し、資本主義を実施する特別行政区である(図1参照)。総面積は32.9km<sup>2</sup>であり、総人口は66.74万人<sup>21</sup>で

19 本稿は2018年8月27日～9月10日の予備調査と、2019年2月7日～2020年1月の調査に基づくものである。新型コロナウイルスは、カジノを主な産業とするマカオに絶大な打撃を与えているが、本稿では詳述しない。また、カジノやサウナなど本稿で挙げられる場所はすべて撮影禁止となっており、筆者所持の写真は公開できない。本稿において挙げるすべての事例の場所、人名は仮名である。さらに、本稿で考察するホステスと売春婦は女性を対象としたものであり、男性のホストや女装の男性売春婦などについては今回の考察では取り上げていない。

20 一国二制度(一国両制、One Country, Two Systems)とは、中華人民共和国の政治制度において、香港とマカオは大陸領域から分離した特別行政区という領域を設置し、主権国家の枠組みの中において一定の自治や国際参加を可能とする政治システムのことである。

21 その中で、「外勞オイロウ」と呼ばれる外部からの労働者が18.84万人である。



図1 マカオの位置 (丸マーク、Google マップより)

ある<sup>22</sup>。

マカオの公用語は中国語 (マンダリン) とポルトガル語であるが、広東系住民が圧倒的に多いため、日常会話は主に広東語でなされている。また、マカオの法定通貨はパタカ (葡幣、MOP) であるが、香港ドル (HKD) と人民元 (CNY) も使用可能である<sup>23</sup>。

また、マカオはもともとマカオ半島、タイパ島 (氹仔、Taipa)、コロアネ島 (路環、Coloane) という三つの島で構成されたが、1990年代後半からタイパ島とコロアネ島との間の海域の埋め立てが進み、コタイ地区 (路氹、Cotai) が形成された (図2 参照)。

他の地域と同じように、マカオにもギャンブルは古くから存在していたが、1872年1月に、香港政庁が賭博の全面禁止令を出したことで香港のカジノ資本がマカオに移転した。これがマカオのカジノ業の発展の第一歩となった (呉・湯・金 (編) 2009: 1818-1819)<sup>24</sup>。その後は国共内戦<sup>25</sup>と日中戦争の影響で激動



図2 マカオの地理的構成 (マーク内、Google マップより)

の時代を迎えるが、この時代のマカオ社会における最も主流なギャンブルが番攤<sup>26</sup>であったため、1961年までが「番攤期」と呼ばれる。1962年にスタンレー・

22 2019年澳門資料年刊参照。

23 マカオで使われる三種類の通貨におけるパタカ、香港ドル、人民元という異なる通貨単位を持っているため、本稿では便宜上、通貨単位を表記する際に、パタカをMOP、香港ドルをHKD、人民元をCNYという表記で統一する。マカオではMOP、HKD、CNYどちらも使えるが、レートの変換を無視し、1:1:1で取り扱われることが多い。(MOP:JPY=1:13.12、HKD:JPY=1:13.49、CNY:JPY=1:15.84、2020年11月14日現在)

24 当時のカジノは、西洋式の「カジノ」ではなく、「賭館」と呼ばれるギャンブルを提供する会館のことである。

25 国共内戦とは、20世紀前半の中国において、中華民国の国民政府率いる国民政府軍と中国共産党率いる紅軍との間で行われた日中戦争(1937年~1945年)を挟む二回にわたる内戦(1927年~1937年、1946年~1949年)である。

26 番攤とは、山積みになった数多い白いボタンを金属カップですくい取り、それを4つずつ分けて、最後に何個余るかを当てるというギャンブルである。遊具は、カジノでは白いボタンを使うが、同色同型で数が多いのであれば、基石やコイン、豆などでても代用されることもある。

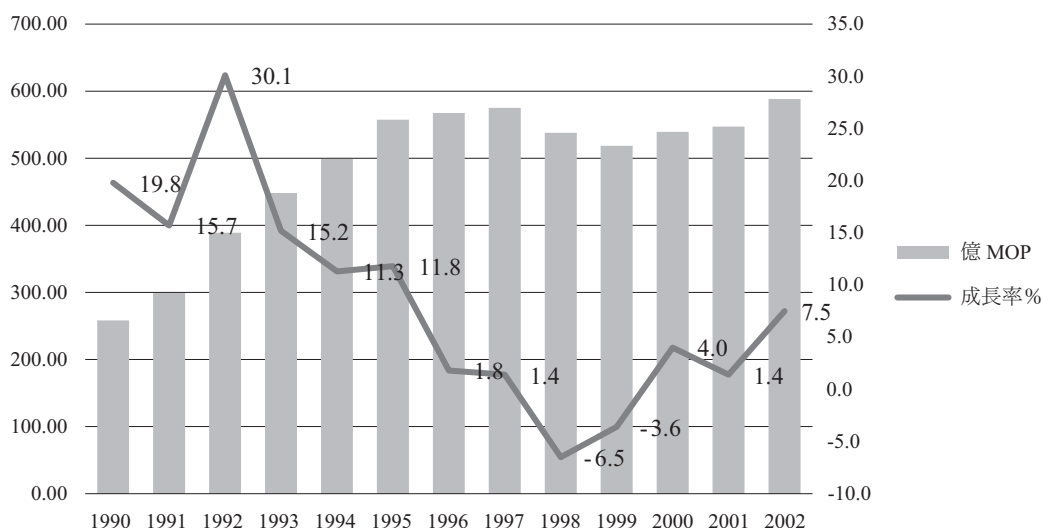


図3 1990年～2002年マカオ GDP の推移  
(澳門特別行政区政府統計暨普查局資料による、筆者作成)

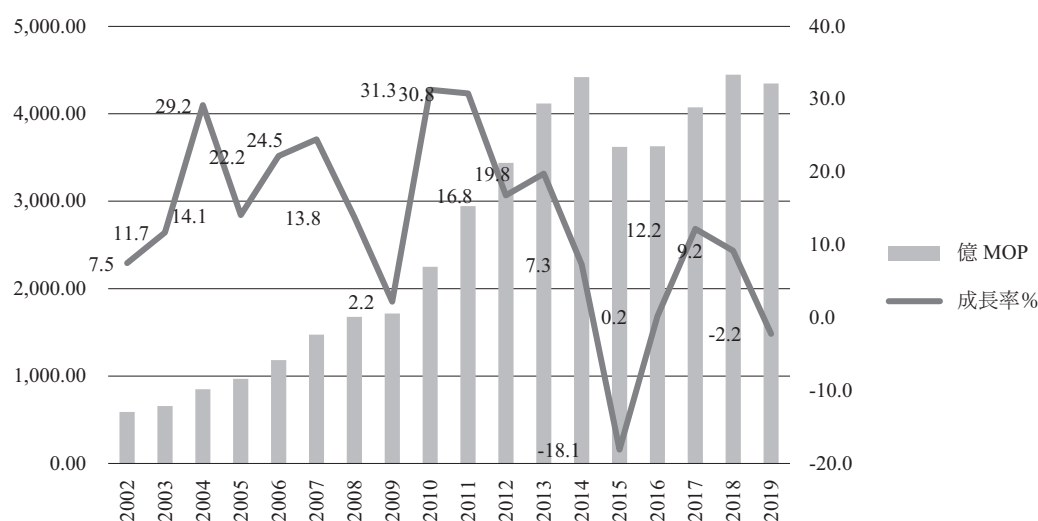


図4 2002年～2019年マカオ GDP の推移  
(澳門特別行政区政府統計暨普查局資料による、筆者作成)

ホー<sup>27</sup>が STDM 社を創設し、マカオ政府と40年間のカジノ営業権の契約を締結し、ホテル・リスボア（葡京<sup>ポウケン</sup>ホテル）をはじめ、数軒のカジノを建設した。2002年まで40年間にわたる「STDM社によるカジノ独占営業期」において、「西洋式カジノ」を導入した。2002年に独占営業権が終わり、カジノコンセッションの国際入札が行われ、これを機に、路氹<sup>ロウタン</sup>地区において総合リゾート型のカジノが次々と建設され、2002年から現在まではカジノ間の競争が多様性をもたらす「総

合リゾート期」と呼ばれる。カジノコンセッション国際入札の2002年を区切りに、1990年～2019年マカオのGDPの推移は図3、図4の通りである。

このように、マカオのカジノの発展には3段階があり、特に2002年カジノコンセッション国際入札を境に、資本の競争によるカジノの多様化が急速に進んでいた。しかし近年になって総合リゾートの開発が停滞を見せ、マカオのカジノ業界はカジノの新たな発展方向を模索するようになった。

27 <sup>ホー・ホンサン</sup>スタンレー・ホー（何鴻燊、Stanley Ho）は、1921年生まれ2020年卒の香港、マカオの実業家である。40年間にわたってマカオにおけるカジノの経営権を長年独占していたというその様態を持って、賭王（ギャンブルの王、カジノの王）と呼ばれることもある。しかし実際、ホー氏はギャンブルゲームのルールさえ熟知しておらず、経営面に優れている「ギャンブルを知らないギャンブルの王」である。



## 2 カジノスタッフの構成におけるホスト部

前節で紹介したようなマカオにおけるカジノの盛況は、カジノスタッフの複雑な構成によって支えられてきた。各会社によって管理職の呼び方が異なるが、カジノスタッフの構成をまとめたのが表1である。

この表はあくまで一般的な例であり、カジノによって細かい違いが生じることもある<sup>28</sup>。また、表からホスト部門が監察主任の統括に入らないように読み取れるが、一部のカジノでは監察主任の管理に従うホスト

部も見られる<sup>29</sup>。

カジノスタッフの構成の中で、ホスト／ホステスとその主任で構成される「ホスト部門」はいささか特殊な部門である。カジノの売上はホスト部門の「腕」によって一定の程度に左右される。その理由として、ホスト部門の仕事内容はカジノの売上における最も割合の多いVIPバカラ<sup>30</sup>と関連するからである。まず、近年におけるマカオのバカラの売上とその割合を表2で示したい。

表1 マカオのカジノの<sup>ジョンチョン</sup>中場におけるカジノスタッフの構成<sup>31</sup>

カジノマネージャー (マカオ、香港を主とした世界各地から)				
フロアマネージャー (マカオ、香港を主とした世界各地から)				
シフトマネージャー (マカオ、香港)				
調理部 (マカオ、香港、東南アジア)		監察主任 (マカオ、香港)		ホスト／ホステス (マカオ、香港、台湾)
		ディーラー (マカオ)	キャッシャー (マカオ)	
清掃員 (東南アジア、マカオ)	ウェイトレス (東南アジア、マカオ)	セキュリティマン (東南アジア、マカオ)		

(カッコ内は出身地、筆者作成)

表2 2015年～2019年マカオのカジノ売上とバカラ売上

(単位：億 MOP)

年	総売上	バカラ売上	総売上における割合	VIP バカラ	バカラにおける割合
				MASS バカラ	
2015	2308.40	2040.30	88.4%	1278.18	62.6%
				762.12	37.4%
2016	2232.10	1958.63	87.7%	1189.60	60.7%
				769.03	39.3%
2017	2657.43	2349.56	88.4%	1506.73	64.1%
				842.83	35.9%
2018	3028.46	2684.94	88.7%	1660.97	61.9%
				1023.97	38.1%
2019	2924.55	2560.01	87.5%	1352.28	52.8%
				1207.73	47.2%

(澳門博彩監察協調局 HP による、筆者作成)

28 この表において大陸出身のスタッフがいない理由は、マカオ政府はマカオ市民保護政策を講じ、中国政府は大陸人がカジノに染まることを防ぐため、マカオ政府と共同で、大陸人がマカオのカジノで職に就くことができないよう工夫をするようになったからである。

29 シフトマネージャー以下の職種は厳格な上下関係を表しているのではなく、一般的に清掃員やウェイトレス、セキュリティマンより、ディーラーやキャッシャー、ホストなどの基本給料が高いことを意味しているだけである。

30 VIPバカラ (貴賓百家樂) とは、オープンスペースの中場で行われるミニマムベットが1000以下の MASSバカラ (大衆百家樂) に対して、より高級感のある部屋である貴賓廳で行われるミニマムベットが2000以上の高額のバカラのことである (ミニマムベットの基準はカジノによって異なる)。一回のゲームにおけるベットは、数千 HKD から数十万 HKD までがよく見られる。経営者によって異なるが、10万 HKD 以上の貴賓廳専用アカウント開設が条件となるところが多い。

31 この表はマカオのカジノにおける中場 (casino floor) のスタッフ構成であり、貴賓廳 (賭廳とも呼ばれる、VIP room) はより簡潔な構成となっている。

このように、カジノの総売上においてバカラ売上は毎年88%ぐらいを維持しており、最も重要な収益源と言っても過言ではない。そして、バカラの中でもVIPバカラが占める割合は高く、ほぼ毎年バカラの60%以上の高収益をもたらしている。さらに、バカラの売上をカジノゲームの総売上と図3、図4のGDP成長率に照らし合わせると、その増減の幅がほぼ一致していることがわかる。MASSバカラとVIPバカラで構成されるバカラはマカオのカジノ業のみならず、マカオ経済も支えており、マカオ社会における大黒柱のような存在である。

その中で、ホスト部門の仕事内容は中場と貴賓廳によって分かれているが、相似の部分が多い。中場のホスト部門は、ギャンブラーたちの会員カードの開設やポイント貯めの手伝い、客室の予約が主な仕事内容である。しかし最も重要なのは、中場に潜むカジノ初心者のような金持ちギャンブラー<sup>32</sup>を見つけ、そのギャンブラーを貴賓廳に連れていくことである。貴賓廳のホスト部門は、金持ちギャンブラーの秘書のようなことをしており、ギャンブラーの出迎え、客室の予約の代行、食事注文の代行、ギャンブルの勝敗金額の記録などが主な仕事内容である。言い換えると、金持ちギャンブラーのもてなしをすることはホスト部門の主な仕事内容である。

また、金持ちギャンブラーはほぼ全員が男性であるため、ホスト部門におけるホステスの割合が非常に高い<sup>33</sup>。ホスト部門に関する具体的な紹介は、III章に譲る。

### 3 「ガウサーフン旧沙圈」と「サンサーフン新沙圈」

サーフン沙圈とは、マカオにおいて最も売春婦が集中して歩きまわり、買春客を探し当てる場所のことをさす俗語である。沙圈はもともと、香港競馬におけるパドック（下見所）を指し、各競馬場では発走前に当該レースに出走する馬が、装鞍所からここに入り、馬券を買う人はここで馬の状態を観察できる場所である。見られる売春婦（馬）が不特定多数の買春客（馬券を買う人）に声をかけることは、競馬でのパドックと若干異

なるが、買春客が売春婦の状態を観察できることから比喩的に沙圈という言葉が使われるようになった。

沙圈は、ガウサーフン旧沙圈とサンサーフン新沙圈に分かれている。旧沙圈とはホテル・リスボアの地下商店街にある長い回廊を指しており、新沙圈とはリゾート群が挟む路氹金光大道（コタイ・ストリップ）を指している。1970年代から、売春婦はホテル・リスボアの近くに集中し、そこで歩きまわって買春客を探し続けたことから、沙圈と呼ばれていた。しかし、2015年1月にマカオ司法部門が沙圈に対する取締活動を大規模に展開し、沙圈から売春婦は姿を消したのである。それから、売春婦は新しい客引きの場所を探し、観光客とギャンブラーが溢れるリゾート群の中心地にあるコタイ・ストリップに行き着いた。ホテル・リスボアの地下商店街とコタイ・ストリップを区別するため、旧沙圈と新沙圈に呼び分けられているが、現在旧沙圈（図5）はすでに閑散としており、様々な国籍の売春婦が新沙圈（図6）で活動している。

旧沙圈と新沙圈における売春婦の構成はやや異なる部分がある。旧沙圈は大陸の女性が主体となっていたが、新沙圈は多くの国籍の女性が見られ、俗に「国際センター」とさえ呼ばれている。大陸の女性の他に、東南アジアと東ヨーロッパの女性が多く、街頭を歩く男性に簡単な中国語標準語と英語で声をかけている。売春婦たちは歩きまわることが多いが、ギャンブラーに長時間見つめられたら自ら会話を交わしに行くのである。「你要去嗎？（行くか?）」をはじめ、「你的房，按摩做愛（あなたの部屋、マッサージとセックス）」のような直接的で露骨な言葉をかけることもある。さらに、客がホテルの客室に泊まっていないなどの理由で場所を用意できない場合、「去我的房（私の部屋に行く）」と言い、売春婦の用意するホテルの客室に行き500HKDほど料金を高く取ることになる。また、英語の場合は簡単な英会話になり、「Go back with me?」「1,500 take care you everything」などが見られる<sup>34</sup>。

警察による取締活動が厳格に実行されない原因は、マカオの法律にある。マカオの法律によると、個人に

32 金持ちギャンブラーとは、一般ギャンブラーと区別するため、本稿における便宜な呼び方である。また、金持ちギャンブラーは主に、一回のベットが数千HKD以上のギャンブラーを指すが、借金をしてまで高額ギャンブルを行う人もいるため、金持ちギャンブラーは必ずしも「金持ち」であるとは限らない。しかし、借金持ちの高額ギャンブラーは高額ベットが長続きしないため、もともと「金持ち」である高額ギャンブラーがメインであるため、金持ちギャンブラーと呼ぶのである。さらに、このような金持ちギャンブラーは大体、非常に儲かる自営業者や多大なる資産を持つ事業家が多く、年取の水準より一定数以上の総資産を持つ人であると見るのが妥当である。

33 女性の金持ちギャンブラーの数が限られているので、ホストの需要は各カジノにおいて比較的到低いとされている。

34 「【沙圈再現】氹仔淪為國際『交流』中心 性感女主動搭訕：去你的房」澳門力報、2018年11月25日。



図5 旧沙圈ホテル・リスボア地下  
(Wikipedia「葡京沙圈」より)



図6 新沙圈コタイ・ストリップ  
(Wikipedia「新沙圈」より)

よる売春は禁止されないが、第6/97/M号法律第一章第一條d項に則り、「<sup>ツォンマイヤン</sup>操縦賣淫（管理売春）」は「<sup>ハッシュェーウイ</sup>黒社会（裏社会）」<sup>35</sup>の定義にあたり、第二條によると「黒社会」への参加は5年～12年の懲役を科すことになる<sup>36</sup>。しかしながら、売春婦は、もし逮捕されても双方の個人による性交渉を言い張れば立証が難しいのである。マカオ性産業の形態の詳述はIV章に譲る。

### III カジノ内の誘惑する女性——ホステス

#### 1 金持ちをもてなすホスト部門

本章では、カジノの内にいる女性のホステスについて考察する。II章第2節で紹介したように、カジノのホスト部門とは、「客をもてなす」のが仕事である。しかし、飲食物の注文品を渡したりするようなもてなしはウェイトレスの仕事である。ホスト部門の仕事は「金持ちの客」をもてなすことであると言った方が適切である。カジノフロアで大金を賭けているギャンブラーをマークし、そのギャンブラーに様々な「攻勢」を展開するのである。

先述したように、マカオのカジノのホスト部門は、金持ちギャンブラーに男性が多いため、女性のホステスが圧倒的に多い。カジノの規模によってホスト部門の構成人数が異なるが、小規模のカジノでも20人ほどである。また、会社経営の中場と貴賓廳、個人経営の貴賓廳のホスト部門が異なる機構となっており、従

業員もそれぞれ異なるのである。

中場と貴賓廳のホステスの仕事はやや異なるが、基本的にはいかにギャンブラーを喜ばせ、より多く賭けさせるかに腐心することになる。中場のホステスは、カジノフロア内において歩きまわり、高額を賭けているギャンブラーを見つけたら直ちに側に寄り添い、サービスが必要かどうかを聞くのである。もてなしを受けたギャンブラーに気に入られたホステスは、そのギャンブラーから一歩も離れず、付き添ってゲームを見守る。ホステス自身は賭けることはせず、ギャンブラーにアドバイスをあげたり、カードの開示中にギャンブラーの隣で応援<sup>37</sup>したりするのである。一回のゲームで大儲けしたギャンブラーは気分によってホステスに chip の tip を渡すことがある。渡されない場合はホステスが自らギャンブラーにねだることもよく見られる。ホステスは金持ちギャンブラーに細心な気遣いをしてドリンクや chip の両替が必要かどうかを見極め、ギャンブラーに話しかける。ホステスの笑顔とサービス精神は「金持ちギャンブラー」のみに向けられるので、「一般ギャンブラー」から不満の声が漏れることもしばしばである。以下は筆者がよく通うあるカジノでの、常連の地元ギャンブラーの語りである。

あのホステスたち、なんか気に食わないと思わない？ 金持ちの奴らにへらへらしてよー。俺たちがドリンクを注文してもいつも無視されるし、二、三

<sup>35</sup> 黒社会は中国語において、マフィアやギャングなど種々の犯罪組織の総括、または犯罪組織や地下経済およびそれらによって形成される社会を表す言葉である。日本語の裏社会や闇社会とほぼ同義であると言える。

<sup>36</sup> [https://bo.io.gov.mo/bo/i/97/30/lei06\\_cn.asp](https://bo.io.gov.mo/bo/i/97/30/lei06_cn.asp) 澳門特別行政区政府印務局 HP 参照。

<sup>37</sup> 応援は手足が小躍りしたりすることなど、様々な形を持っているが、バカラのカード開示途中で金持ちギャンブラーが勝てるカードの点数を叫ぶ「<sup>アイハイ</sup>唵牌（カード叫び）」というやり方が最も多く見られる。

回聞いたら「しつこいよ。ウェイトレスを呼びな」と言い返されたんだよ。しかもその口調、金持ちの奴らと話す時と全く別人だ。でも仕方ない、だって俺らは金持ってないし。フロアで一番きれいな格好をしてよ、俺ら全員にその身体を見せるわけじゃないのかよ(2019年8月20日)。

ホステスの「一般ギャンブラー」に対する「差別」は、ギャンブラーたちの間では暗黙の了解となっている。そのため、同じカジノフロアにいるとしても、「一般ギャンブラー」とホステスの間にはほぼ会話は生まれない。

ホステスは、金持ちギャンブラーとある程度ギャンブルを続けたのちには、そのギャンブラーがそのカジノのホテルに泊まっているかどうかを聞き、宿泊の延長やカジノポイントカードの開設、当カジノ運営会社所属の貴賓廳を訪ねてみないかなど、様々な「誘惑」を始める。ギャンブラーがその「誘惑」に乗ったと判断するや、ホステスはギャンブラーのSNSをフォローし、次回マカオ旅行の際に再度そのカジノとホテルを利用するように、様々な割引や予約の宣伝をする。

貴賓廳のホステスは、中場より多くのtipがもらえる可能性のある分、金持ちギャンブラーに対するもてなしもより念入りになる。彼女らの仕事はギャンブラーがカジノに入る前から始まる。往復のフライトや高級客室の確保は言うまでもなく、ギャンブラーがマカオに到着した際の出迎えも行う。ギャンブラーが貴賓廳にいる間に、飲食物の注文、搬送も任されるが、最も重要なのはギャンブラーに対する「<sup>ガンソウ</sup>跟数」<sup>38</sup>である。貴賓廳にいる金持ちギャンブラーは、「手持ちではない金」、すなわちクレジットカードや裏社会絡みの借金でchipと換金して賭けることが多く、帳じりが合うようにするためにはホステスの記録が重要な参考資料になる。ギャンブル中のホステスの仕事は中場と変わらず、ギャンブラーの応援をすることなどである。しかし、中場と比べ貴賓廳の金持ちギャンブラーは気性の荒い人も多く、怒鳴られたり、不意に蹴られたりすることも覚悟しておかないといけなく貴賓廳のホステスは語った(2019年9月27日)。

ホステスの給料は基本給とtipで構成されており、原則としてtipが多いほど収入が膨れ上がり、無制限

である。基本給はディーラーほど高くないと見られるが、努力次第tipの総額でディーラーよりもはるかに高収入が得られる可能性もある。しかし、ほぼどのカジノのホスト部門でも場内でもらったtipは、すべて部門に上納する義務が課せられ、ホステス全員のtip総額を月々山分けして給料の一部として足す仕組みとなっている。また、tipを上納せず自分の懐に入れた場合、万が一その事実がばれると解雇される。tipの山分け制度によってホステス間の競争関係がほぼ見られないが、給料は等しく上がるのでそれぞれがtipねだりに励んでいる。まとめると、マカオカジノのホステスは、金持ちギャンブラーをもてなし、そのギャンブラーを喜ばせてより多くのtipをもらうこと、そしてより多くの金額を賭けさせることが彼女たちの「存在意義」であると言える。

## 2 女性ディーラーから見るホステス

ホステスのことが気に食わないと思っている人は、「一般ギャンブラー」の他に一部の女性ディーラーが挙げられる。上限なくtipで給料が膨れ上がることもあるホステスの「特権」は、カジノコンセッション国際入札まではディーラーのものであった。2002年以前、まだSTDM社の独占営業の時期は、ディーラーの給料が低く、収入の大部分がギャンブラーのtipで補われていた。その時のtipは、「茶<sup>チャーチン</sup>銭(ヤムチャの金)」と呼ばれ、現在のホステスのtipと同じように、カジノ全体が茶銭を共有し、「茶銭箱」が設置されていた。現在のホステスのtipと異なる点として、ディーラーへの茶銭が客に対してほぼ強制されており、勝った時の元金がディーラーに吸い上げられることになっていた。茶銭を渡さないギャンブラーに対して、ディーラーはすこぶる悪口を言った。「いずれ全部負けるぞ」「その金持って薬でも買ってろよ」と暴言を吐かれたと、年寄りのギャンブラーは筆者に語った(2019年8月20日)。

しかし、2002年カジノコンセッション開放後、ホスト部門の急成長に伴い、ディーラーの基本給は大幅に底上げされ、もはや茶銭を頼らなくても良いほどの給料となった。そのため、ギャンブラーから茶銭をねだるディーラーは大幅に減少した。現在では顔を知らないギャンブラーに茶銭をねだるディーラーはほぼ見

<sup>38</sup> 跟数とは、ギャンブラーの賭け金とその収支を細かく記録し、簡単な表を作成して報告することである。

られない。軽く冗談を言うつもりで常連のギャンブラーに茶銭をねだることはあるが、それを無視されても気にとめないのである。ギャンブラーの tip はディーラーの茶銭からホステスの tip に変わり、その上近年大陸の経済発展に伴い、昔の茶銭より現在の tip の方がよほど高額になった。ディーラーの基本給はホステスより平均的に5000MOP 高いと言われるが、tip を加算するとホステスの方がはるかにディーラーの給料を上回ることが多い。

ところが、女性ディーラーがホステスのことが気に食わないと思っている理由に、tip の「特権」が奪われたこととは別に、ギャンブラーに媚を売る態度が気に入らないというものがある。中高年層のディーラーは、若い時に茶銭をもらう心得として「表情の管理」が重要だったと述べた。ギャンブラーが負けたら、ディーラーは笑っていけないし、無表情でもダメなのだという。それに比べて、現在のホステスはただ金持ちギャンブラーに甘えたらいいと思っている、と女性ディーラーたちは話す。ホステスが近くにいない時に、ある女性ディーラーが一般ギャンブラーに以下のようなことを話した。

その甘ったるい声が気持ち悪いよね。聞くだけで作り声だとわかるし、なんで男性はみんなそういう子がいいの？ 私から見れば彼女たちはただ媚を売る狐で、体を売って tip をもらうことしかやっていないね。現にホステスって面接がそこまで厳しくないよ（2019年8月20日）。

テーブルを仕切るディーラーはギャンブラーとの身体接触がほぼないが、常にギャンブラーに接近するホステスは「体を売る」とここで表現されている。カジノにおいて同じく tip をもらうもの同士であり、ギャンブラーとの対面が最も多いディーラーとホステスの間には、「身体の使い方」の違いが生じるのである。しかし、裏返せば、表情管理の困難さを例に挙げたように、tip のもらい方に身体の制約があったディーラー

に対して、ホステスは全身を活用できる自由さを持つ<sup>39</sup>。この会話からは一種の羨望あるいは嫉妬も垣間見える。次節は、1人のホステスの語りを中心に、具体的にホステスの「誘惑する身体」について考察する。

### 3 ギャンブラーを誘惑する身体

本節では、ある小規模のカジノで働いているホステスの<sup>イーリン</sup>宜林の語りを紹介し、ギャンブラーを誘惑するホステスの身体について考察を行う。宜林は台湾出身の31歳の女性であり、仕事の仲介会社を通じてマカオカジノのホステスとして6年間働いている。マカオに来た当時、すでにマカオ人の夫を持ち、現在2人の子どもを育てている。マカオで6年間も働いたものの、籍を移していないので依然として<sup>ランカー</sup>藍卡持ちの<sup>オイロウ</sup>外労に変わらない<sup>40</sup>。外労の福利厚生はマカオ人ほどよくないが、カジノ会社の福利厚生と合わせやり繰りしている。

宜林の話によると、ホステスの面接は非常に簡単なものだったようである。自己紹介が終わったら、広東語と英語の習得状況やマカオで就労する理由、ホステスの仕事内容についての理解など当たり障りのない質問ばかりがなされる。面接に通ると、仲介費もカジノ会社持ちで往路のフライトのチケットを購入してもらう。宜林は夫と住むため利用しなかったが、他の同僚はマカオに到着すると4人1部屋の寮が無料で会社側から提供された。制服は会社指定のものであり、色気の溢れる制服ではなく、デパートの化粧品カウンターのスタッフとほぼ変わらないような、スカートも膝まで覆う保守的な服装である。しかし、制服はすべて会社で保管されており、chipの窃盗防止のため、退勤してもカジノの外に持ち出すことは禁止されている。

宜林の基本給は月14000MOPであり、それに対してマカオ人の同僚は16000MOPと多いが、宜林は外労の身分を持っているため給料の差について理解を示している。ディーラーたちは大体月17000MOP ぐらいであるが、ホステスの努力次第で宜林の給料がディーラー

39 本稿では詳しく展開できないが、接客業における客に対する感情表出ないし感情表現に関する規範について、「管理される心」の中心主題であるの「感情労働」を論じたホックシールドを参照されたい（ホックシールド 2000[1983]）。

40 香港や台湾出身の人を含め、マカオ市民以外の人々が就労する際に、<sup>オイロウ</sup>外地僱員証（通称「藍卡」、<sup>オイロウ</sup>青いカードの意）の発行が必要となる。外地からの労働者はすべて<sup>オイロウ</sup>外労（<sup>オイロウ</sup>外地勞工の略）と通称され、藍卡在留資格を証明する書類となっている。マカオ市民を優先させる風潮は、マカオ社会における職場文化の一つと言われており、各企業はマカオ人の昇進を優先し、藍卡持ちの人の昇進は珍しいとされている。さらに、現在コロナ禍によって藍卡の資格延長が非常に厳しくなり、外労は真っ先に各企業にリストラされることになっている。

より上回る月もあったと言っている。tipのねだり方は人によって異なるが、宜林は台湾出身特有の「台湾華語」の甘えたアクセントで大陸人の金持ちギャンブラーを落としているという。宜林はtipをもらう秘訣について以下のように述べた。

tipをねだる時はね、図々しくならないといけないのよ。大陸人の男性は台湾女性の甘いアクセントが好きらしくて、私のような自然体でも結構うけるみたい。香港人の男性なら、生半可の片言広東語がいいわ。とにかく可愛く見せられることが私の武器よ。彼らには私が2人の子を持つ母親に見えていないらしいわ。5000HKDのchipを勝った男は、少しだけねだれば大体私に250HKD小銭のchipのtipをくれるわ(2019年9月29日)。

さらに、彼女は他のホステスのねだり方について説明した。

私は家族を持っているからやらないけど、若いマカオ人のホステスは不意を装ったボディータッチをしている人もいるよ。ドリンクを渡す時に自分の手を触らせたり、chipの両替を頼まれた時に指先でギャンブラーの手のひらをタッチしたりするところ、私何回も見たわ。これは中場だからギャンブラーはそれほどのお金持ちでもないし、ギャンブラーとホステスの間の関係もそこまで親しくないから控えめだけど、貴賓廳になるとホステスがギャンブラーの肩を揉んだり、胸をギャンブラーの頭にたまたま載せたりすることもあるよ。みんなそれぞれ得意の「武器」を持っているわ(2019年9月29日)。

宜林は自分と他の若いホステスの「身体の使い方」を比較した。家族持ちの宜林は直接的な接触の代わりに、身体の延長線と見られる甘えた声で男性ギャンブラーを喜ばせている<sup>41</sup>。それに対して、まだ家族を持っていない若い女性または身体接触を気にしない女性はより開放的な身体接触を持ってギャンブラーを誘惑する。そして、身体接触の度合いはまた、ギャンブラーの財力に左右される。中場にいる一般ギャンブラーより少し高く賭けているギャンブラー(一回5000HKD

以上)に対してホステスの身体接触は控えめであるが、貴賓廳にいる非常に高額を賭けているギャンブラー(一回数万HKD)に対してホステスの身体接触はより大胆である。

ホステスのギャンブラーに対する誘惑の攻勢はカジノ内において完結したものではない。すでに紹介した通り、ホステスは退勤後chipの持ち出しが禁止され、出勤の間にももらったtipを部門に上納する義務が課せられるが、宜林は、多くのホステスが金持ちギャンブラーとカジノの外においても連絡をとっていることについて他のホステスの話を補足した。

他の子たち、特に貴賓廳のホステスはね、はっきりとは言わないけど、夜中に金持ちギャンブラーと性的関係を持つてるに違いないのよ。カジノ内でもらえるtipは監視カメラだけじゃなくて、ディーラーや部門主任、マネージャーたちみんな見ているからかなり限られているわ。外でもらった「tip」なら上納しなくても良いし、ホステスの職場外の「付き合い」は会社の干渉が入らないの。

私の知っている限り、本当に様々なパターンがあるの。新人の貴賓廳のホステスが2週間くらい出勤したら、身につけているものは全てブランド品に変わって、その後突然仕事もやめたわ。大物の誰かを捕まえて、その愛人になったはずよ。ギャンブラーに「一晩の料金」を直球で聞かれるというのもよくある話よ。2年くらい働いているあるホステスは、ホスト部門主任に昇進する機会があってもそれを断ったのよ。なぜかって? 主任になったらホステスの管理に専念することになって、直接金持ちギャンブラーに触れる機会がなく、むしろ収入が減るからって言ってたよ。貴賓廳のホステスはみんな、中場のホステスより容姿もスタイルも良いの。誰も公言していないけど、30歳以上は貴賓廳のホステスになれないみたい(2019年9月29日)。

家族を持ち、藍卡である宜林は昇進する機会が少なく、上昇志向も低いのが、野心ある金目当ての若いホステスは、あの手この手を駆使して金持ちギャンブラーを誘惑している。監視の網が張られるカジノの領域内はむしろ、若いホステスたちにとっての「狩場」であ

<sup>41</sup> また、身体を触れられたら断る宜林は、ギャンブラーの不機嫌を買う場合もあるが、すぐ他のホステス呼んでそのギャンブラーをもてなすことは彼女なりの策だと、上記と別の語りで述べた(2019年9月29日)。

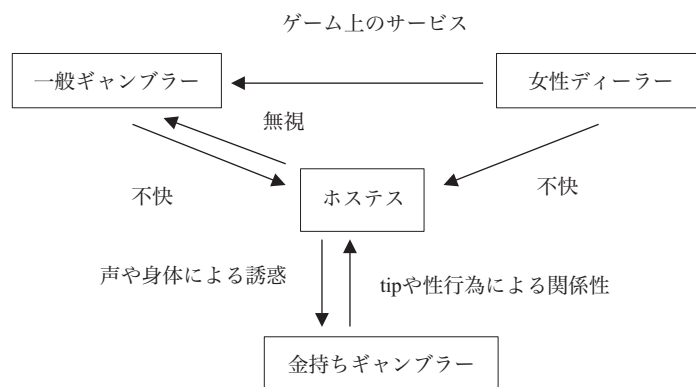


図7 ホステスをめぐるカジノにおける他者との関係性（筆者作成）

り、身体を活用して金持ちギャンブラーを誘惑する「飛び石」となっている。金持ちギャンブラーに自分の身体を簡単に触れさせる機会がないため、部門主任に「昇進」することは、彼女たちにとって逆に「降格」なのである。ホステスの誘惑的仕草が金持ちギャンブラーを釣り上げるためのものであることは、一部の女性ディーラーの間で「合法鶏（合法売春婦）」と風刺される。

ホステスは、金持ちギャンブラーの集客のためにカジノ側が用意する「誘惑者」である。全ての客にサービスを提供するディーラーやウェイトレスなどと異なり、ホステスは金持ちギャンブラーへの「専属的存在」である。そして、金持ちギャンブラーへのホステスの「もてなし」は、甘い声や不意の身体接触など、女性の発する性的暗示が含まれるものである。ホステスはこうして自分の身体を生かし、金持ちギャンブラーを魅せる主体性という「能動的誘惑」の関係性が生まれるわけである。しかし同時に、ホステスは金持ちギャンブラーを所有したいわけではなく、自ら金持ちギャンブラーの所持品になろうとして奉仕する「積極的従属」が見られるのである。ホステスを中心としたカジノにおける他者との関係性は図7にまとめる。

考察する。現在マカオの性産業は合法ではなくなったが、揉め事を起こして警察に通報されない限り問題となることはほぼない。カジノから出たギャンブラーが主な客層であるため、性産業の場所はカジノ周辺にあるサウナ、マッサージ屋、昔の「夜總會（ナイトクラブ）」<sup>42</sup>などとなる。紹介者がカジノフロア内やリゾート構内で客に声をかけることはあるが、売春婦が店の外で客引き行為をしたり、直接カジノフロア内で客を誘うことはほぼなく、紹介者を通じて客とのやり取りを始めることが基本である。

まず、マカオの性産業で最も活発なサウナについて紹介する。マカオにおける合法サウナの大部分が大手会社経営であり、カジノの規模や立地によって値段がそれぞれである。性的サービスが入っていない「純サウナ」は大体400～700MOPであり、最も評判の高いRカジノのサウナは1900MOP前後である。性的サービスは「蜜月式（ハネムーン式）」<sup>マイユイツセ</sup>という隠語が使われており、オプションとして追加した場合は値段が跳ね上がり、2200MOP以上が相場となっている。マカオ公式の統計上はサウナ従事者の女性数が明記されていないが、筆者は一度だけ大手のSサウナの受付からそのサウナの営業状況と従業員構成を聞いたことがある。

## IV カジノの外にいる厄祓いの女性

### ——売春婦

#### 1 遍在する性産業の場所

本章では、カジノの外にいる女性の売春婦について

ここは24時間営業で正規のマッサージのみの営業は午前8時から午後2時となっているが、それ以外には「例のサービス」が含まれている。一番客が多い時間帯は夜11時から深夜2時までで、言うま

42 マカオの夜總會は後述するように、日本式ナイトクラブの形を引き継いだ香港の夜總會を導入したものである。日本におけるナイトクラブは様々な種類と業種を持っているが、マカオと香港が引き継いだ日本式ナイトクラブは、ダンスフロアやカラオケがついており、営業形態がキャバクラと似たように、キャバ嬢と似ている「夜總會女公関（ナイトクラブホステス）」<sup>イエーゾンウイ</sup>が客をもてなす店である。日本のキャバクラより規模が大きいのはマカオと香港の夜總會の特徴である。

でもなく平日より休日のほうが客が集まる。この前の国慶節連休(10月1日～7日、中国のゴールデンウィーク)のある日に1日で900人くらいの客が来ていたと思う。客はほぼ全員ギャンブラーで、賭けずに遊びだけに来ている客は非常に少ない。30人に1人くらいかな、それ以上に少ないかもしれない。

所属の女性数は、はっきり覚えていないけど、200人くらいはいるだろう。もちろん大陸の子が一番多いけど、東南アジアの子も多いかな。でも全員があれをできるわけじゃないんだよ。特に東南アジアの子はフットセラピーと普通のマッサージが多いと思う。前まで韓国と日本の女性もいたけど、値段が高すぎて客が寄ってこないからこの前帰国したなあ。

値段? それぞれだけど普通のマッサージなら500MOPからで、あれが含まれると2388MOPだよ。もちろん良いお嬢さんのほどそれ以上高くなる場合もあるけどね(2019年10月17日)。

さらに、彼は客引きの配当について言葉を続けた。

集客はタクシー運転手とカジノの無料シャトルバス運転手に頼る部分が多い。客を1人連れてくると100MOPの配当がもらえる。しかし会員証を持つ常連を連れてくるとその半分しかもらえない。だから男性だけの移動が非常に声を掛けられやすいよ。君も聞かれたことあるかい(2019年10月17日)。

この受付担当の話からマカオのサウナ業の一角を窺うことができる。客も売春婦も大陸人が主体であり、稀に外国籍の女性も所属している。普通のサウナとマッサージを除き、集客は運転手に任せることが多い。サウナの受付は大体外労の東南アジア出身の若い男性が担当しており、簡単な中国語、広東語、英語を操ることができる。彼らに問い合わせるのは運転手と

その連れの客が多く、たまにカジノから出たギャンブラーも来ているようである。

次に大手会社経営のサウナと異なる、個人または小さい組織の経営が多いマッサージ屋について述べる。マカオのさびれた路地裏では、様々なマッサージ屋が見かけられる。従業員は25歳～35歳の東南アジアの女性が多く、大陸女性は少数で、30歳以上がメインである。サウナと比べ空間が狭く、格安の宿泊施設として使われることも多い。立地や店の条件によって値段が異なるが、夜8時間パックは大体250～300MOPであり、休日は100MOPくらい上がるのである。また、「蜜月式」オプションもサウナより安く、688～1688MOPなど様々な値段が見られる。しかし、大手会社経営のサウナのように組織に守られることがないため、警察の法的捜査対象として狙われやすい<sup>43</sup>。性的マッサージと明言する報道記事は多くないが、個人経営のマッサージ屋は一般に、必ず「蜜月式」のマッサージが付いていると言われている。その他に、マッサージに従事する外国籍女性は犯罪と結びつけられて想起され、不法滞在の存在のみならず、犯罪行為を度々犯しているというイメージがマカオ地元住民の間に定着している。具体的には、窃盗罪<sup>44</sup>や覚醒剤の密輸<sup>45</sup>などがしばしば新聞によって取り上げられている。

続いて、夜総会の廃退について紹介する。日本のナイトクラブのスタイルが伝播して、1980年代香港で流行り、すぐにマカオにも導入された。方(2012)によると、1990年代にマカオの夜総会は全盛期に入ったが、2010年前後になって賃金の急上昇やサウナ業の発展、大陸人在留期間の短縮、珠海市における同業との競合、若者の歓楽文化の変化などにより、名門の夜総会の閉業が相次ぎ、現在では財力を持つ財閥が経営する夜総会のみが生き残っている<sup>46</sup>。

特に深刻であるのは若者の歓楽文化の変化の影響であった。夜総会の常連の中高年層と異なり、今の若者はスピード性<sup>47</sup>を重視する。スピード性については、

43 具体的な報道は以下を参照されたい。

「九内地女涉民居經營非法按摩帶查」澳門日報、2018年3月1日。

「警搗沙梨頭非旅截十色情按摩女」澳門日報、2019年4月9日。

「治安警反罪惡巡查截兩色情按摩女」澳門日報、2019年12月10日。

44 「越籍按摩女盜室友三萬二輪光法辦」澳門日報、2018年12月28日。

45 「按摩女運值76萬毒郵包與過夜客齊落網」澳門日報、2020年5月26日。

46 方東青「爽爆：澳門夜總會式微 舞國風華褪色」蘋果日報、2012年10月31日。

47 若者は酒を飲み、カラオケを歌って、それからようやく「クライマックス」に入るというような手順が時間の無駄であると考え、段取りの必要ないサウナの利用が多くなるようである。



表3 マカオにおけるカジノ外部の性産業の形態

経営形態		特徴	
場所（拠点）あり	大手会社経営	サウナ	大手集団の経営 最も人気である 法的に捕まりにくい
		夜総会	90年代が全盛期 2010年前後廃退
	個人（または小さいグループ）経営	マッサージ屋	街中に偏在 サウナよりも安い 捕まりやすい
場所（拠点）なし	遊弋女		様々な場所に出没 2015年まで「旧沙圏」 2015年から「新沙圏」

(筆者作成)

大陸からのギャンブラーでも当てはまり、彼らはサウナでさっさとことを済ませ、その後ですぐにカジノに戻る傾向にある。

最後に、最もリスクが高い、紹介者あるいは売春婦の直接の声掛けについて述べる。営業場所を持つ上述の性産業とは異なり、彼女らはカジノの内外においてうろついてターゲットを探し、組織か客の用意した場所で売春を行う。II章で紹介した通り、2015年から最も売春婦が集中する場所は「<sup>サンサーファン</sup>新沙圏」路氹金光大道（コタイ・ストリップ）であり、ギャンブラーの間では「<sup>ツウブツツウダーダオ</sup>去不去大道（行かないか？ ロード）」とも呼ばれている。

しかし、長年黙認してきたマカオ警察だが、「新沙圏」でも2010年末から取締活動を開始し、現在に至るまで定期的に多くの売春婦とその背後の組織を次々と拘束してきた。売春婦は木から木へと飛び移って鳴く鶯に喩えられ、報道記事においては「<sup>ラウイエン</sup>流鶯」と呼ばれており、現在でも流鶯逮捕の記事が毎月数回ほど見かけられる。コタイ地元住民と常連のギャンブラーの話によると、2010年以前と比べるとカジノ内外にうろつく売春婦が減ったが、それでも一定数存在しているとのことである。

カジノ内外の売春婦は人目をしのいで一定のルートを持たず、依然として歩きまわっている。一部のギャンブラーの間ではそのことから「<sup>ヤウイェツノイ</sup>遊弋女」とも呼ばれている。カジノの内部において、大規模のカジノのほど遊弋女が多く、ギャンブラーを装ってスロットマシンの周りを歩き回ることが多い。カジノの外部において、大型リゾートのカフェに座って通りかかるギャンブラーを「狩る」遊弋女も多く見られる。警察の取締活動から目を逸らすため、用心深くなった遊弋女は自ら男性に声をかけることがなくなり、ポケットに電

話番号を書いた紙を男性ギャンブラーに渡せるように準備している。遊弋女に詳しいと自称しているある男性ギャンブラーは、コタイ地区の遊弋女の活動について以下のように述べた。

彼女たちの目は鋭いよ。場内のギャンブラーの見かけを通してその人がホテルのどの階くらいに泊まっているのか判断している。値段の交渉だけではなく、客室に入ったらすぐクローゼットをチェックする。なんでって？ 長く泊まっているかどうかを見るんじゃないかな。それで、ことを済ませたら1500～2000HKDをもらっているようだ。私は話したことがないのでわからないけど、稀にヨーロッパ人っぽい女もいる。噂によると4000～5000HKDくらいが相場らしいぞ（2019年10月17日）。

このように、ギャンブルと切り離せない性産業はカジノの外部においても遍在する。その多様な形態は表3にまとめることができる。

マカオは、性産業がいたるところに遍在する点で、「<sup>チェンヌエージェーディオウムンガイ</sup>情色之地澳門街（エロスの地マカオ）」と呼ばれることもある。ことに至るまでの時間が長く客を焦らす夜総会や、たびたび警察の取締対象となるマッサージ屋より、時短性の追求、法的な安全を求める顧客が多く、サウナ業に人気は集中している。また、場所有りの性産業におけるサウナ業の台頭とは別に、場所なしの性産業の遊弋女は2010年からマカオ警察の法的取締活動の頻度の増加によって街頭から一時期姿を隠し、近年では「新沙圏」で復活しつつある。次節では、一般女性がマカオの売春婦になる過程について紹介し、そのプロセスにおいて欠かせない「<sup>ジョンガンヤン</sup>中間人（ブローカー）」を中心に述べる。

## 2 売春婦になる

サウナや夜總會のような大手会社経営の会社と性産業従事または希望の女性の間を繋ぐのは、<sup>ジョンガンヤン</sup>中間人である。本節では、大陸の女性がマカオの売春婦になるまでのプロセスについて紹介し、主に中間人を中心とした売春婦と性産業の運営会社の関係性をめぐって述べる。

まず、中間人は大陸の各サイトで「求人広告」を出す。「マカオ 求人」で検索すれば、「マカオホステス求人」「マカオモデル求人」のようないかがわしい求人情報が大量に出てくる。「マカオホスト会社直接求人」を偽った中間人は大量のサイトに広告を投入する。月収10万 CNY というフレーズで女性たちを引き寄せ、中間人の SNS アカウントをフォローさせる。大陸の女性はカジノのホステスは大陸出身の人が応募できないという規則を知らないまま、中間人とのやりとりを始めることになる。そして、中間人は応募女性とコミュニケーションを重ねてある程度の信頼関係を築いた上でマカオと隣接する珠海市まで呼びだす。

そこで運営会社の面接を受けることになる。運営会社は、中間人経由の女性だけに面接を設けるが、あくまで面談という形を取ることが多く、最も重要なのは、応募の女性が「自発的」にこの仕事に就くかどうかである。その理由について、筆者はある<sup>ガイタウ</sup>鶏頭（次節詳述）に彼女とやりとりをしている中間人の話を聞いた。

彼が女性を選んでいる時に最も大事な条件は、その女性が自発的かどうかなんだよ。これ（性産業）、マカオでは一応違法なんだから、従事者が万が一通報したら大変なことになるわ。だからこの業界ではみんな、これに関しては非常に慎重なの。

後はね、客に嫌な思いをさせてはいけないからね。急に泣き出したり、部屋に入って突然やめたりされたら、中間人も会社も困るの。だからこの点に関してはもはや必須条件と言ってもいいわ（2019年9月25日）。

さらに、面接に合格したら、中間人は女性の素質に応じて珠海市の性産業場所で試用期間を与えるかどうか

を決める。試用期間の長さは決まっていないが、その女性が客のものを盗んだり、仕事をサボったり、態度が悪かったりしないかを観察するようである。試用期間が終わったら中間人は女性のマカオ滞在に関する書類や証明など全て手配し、それでようやく女性が正式的に「出勤」するようになる。

女性はマカオの性産業場所の運営会社で売春婦になったとしても、中間人との関係を断ち切ることはできず、中間人に<sup>グァイグァイフアイ</sup>「<sup>グァイグァイ</sup>婦底費」<sup>48</sup>を上納する義務が課せられる。婦底費の納め方は中間人によって異なるが、合計5万 HKD から20万 HKD まで徴収したり、毎回の交渉金額の20%を控除したり、様々な形が見られる。その代わりに、中間人は売春婦の責任を引き受けることになり、売春婦が「勤務先」で過ちを犯しても性産業の運営会社に問責されることなく、運営会社が中間人に責任を取るようにしているのである。また、売春婦の在留期間の更新や身分証明の用意（または偽造）は中間人に任される他、さらには毎月一定の金額である「紹介費」という上納金を課す場合もある。

また、売春婦が中間人に費用を渡すのみならず、性産業の運営会社も中間人に売春婦の「管理費」を払う必要がある。これは、売春婦の責任を中間人が引き受ける事によるものであり、中間人は毎月運営会社と売春婦両方から大量の金額をもらっているのである。

しかし、女性がマカオの売春婦になった後のマカオでの生活の管理は運営会社によってなされるものではなく、次節で紹介する<sup>ガイタウ</sup>鶏頭が生活面をフォローすることになっているのである。

## 3 売春婦を管理する<sup>ガイタウ</sup>鶏頭

広東語において売春婦の俗称は<sup>ガイ</sup>鶏（中国語：ジー）であり、売春婦の管理者またはマネージャーはマカオにおいて「<sup>ガイタウ</sup>鶏頭（<sup>かしら</sup>鶏の頭）」と呼ばれている。鶏頭と中間人は同じグループまたは組織に属していることが多く、場合によっては1人で中間人と鶏頭を兼任することもよく見られる。本節では、筆者があるカジノで知り合った香港からの鶏頭の1人の語りを中心に、鶏頭による売春婦の管理について紹介する。

近年の報道記事によると、中間人と鶏頭は主に、大陸人のグループとマカオ人のグループが連携し、大陸

<sup>48</sup> 婦底費とは、売春婦がマカオでの初仕事を終えると中間人に渡す費用のことであるが、婦底費の一括払いの困難さと書類の手配の問題によって、中間人と売春婦の関係性が続く。

人は女性の紹介<sup>49</sup>、マカオ人は「場所」の提供<sup>50</sup>という役割分担をしていることが見られる。グループは極めて少人数であり、3～5人という形が最も多く見られるが、1人だけでも女性の紹介から場所の提供までやり遂げることができる<sup>51</sup>。前節で述べた中間人が性産業の運営会社に女性を紹介するような、紹介と管理が分断する方式と異なり、このような連携グループまたは個人は、売春婦（遊弋女）たちを分散的に活動させ、少人数による売春活動を警察や観光客に見せかけ、売春婦の紹介と管理が一体となっている。

場所なしの性産業と小さいグループの性産業と異なり、運営会社が付いている性産業または比較的に大きいグループの性産業は、中間人と鶏頭の役割分担がより明確である。主に大陸（特に珠海市）において売春婦の紹介に専念する中間人に対して、鶏頭はマカオにおいて売春婦の管理を引き継ぐのである。そのため、前節で紹介した中間人の一部の役割を引き受ける存在となり、在留期間と書類の更新や売春婦の責任を取ることのみならず、さらに売春婦の生活の管理と客の接待などが、マカオの鶏頭の「仕事」となっている。この場合、中間人は売春婦の紹介を終えて紹介費をもらったらその女性との関係をほぼ断ち切るようになる。

マカオにおける鶏頭は大陸人かマカオ人の場合が多いが、本稿で紹介する鶏頭は香港人である。曉琪は50代で、ウェーブの髪型をしてスカーフを巻き、いつも膝の少し下の部分までのドレスに黒いストッキングを履いており、その貴婦人風の装いが特徴の女性である。彼女はあるカジノにほぼ毎日と言ってもいいほど入り浸っている。規模の小さいカジノのため、カジノフロアには地元の高齢者や中高年層の観光客が多く、曉琪の格好はいささか浮いた存在である。

観光の在留期間が最大1週間である大陸人と異なり、香港人は、就労しない限りマカオ在留期間は一回で最大1年までと長い。曉琪はこのカジノのコンプ<sup>52</sup>を使い、カジノが付属しているホテルの17階にある

客室に「住み込んでいる」。筆者は一回だけ曉琪の部屋に入ったことがあるが、必要最小限のものしか置いていなかった。曉琪は取締が来たとしてもすぐ移動できるように、ホテルと別の住所に様々な必要品を置いているという。それでも曉琪は、相当なことが起きない限りホテルに「住んで」、手下の売春婦たちを管理しやすいようにしている。以下は、曉琪の客引きと売春婦の管理、カジノ側との関係について述べる。

鶏頭は売春婦の管理役に徹し、決して自ら顔を出して客引きしない。他の仕事は、ネットに冴えない広告を出すこと、客引きの手段として運転手を依頼することとピラ撒きである。運転手はいわゆる前述の「紹介者」にあたり、タクシー運転手とカジノシャトルバス運転手に分かれている。運転手と鶏頭の間に対一の契約を結ぶことがなく、相当な自由を持って客引き活動を行っている。曉琪の話によると、1人の運転手が複数の中間人か鶏頭の連絡先を持っており、彼らは現在地から最も近い場所や紹介料の高いところへ客を連れていくようである。マカオの運転手なら、誰でも潜在的な紹介者である可能性が高く、「いいところあるかい」と運転手に聞けば案内してくれる仕組みになっている。紹介料は鶏頭によって異なるが、曉琪は一回100MOP程度渡していると述べた。曉琪は現在40人以上の運転手と連絡を取っており、複数の電話番号を持ち、転送電話の機能を使うことで警察にばれないようにしている。

もう一つ重要な客引きの手段はピラ撒きである。特に性産業宣伝のピラはマカオにおいて「色情單張（エロピラ）」と呼ばれ、近年まで深刻な社会問題として議員に取り上げられたこともある<sup>53</sup>。ピラを撒くことは、マカオ住民の間では嫌悪感を込めて「撒溪錢（冥錢撒き）」と呼ばれるようになった。2013年頃までは色情單張の配布者逮捕の記事がよく見られるが<sup>54</sup>、近年は取締活動が減ってきた。曉琪も、報道記事と同じく、主に地元の中高年層女性を雇って街頭でピラを配布している。この時、曉琪は配布者と直接会

49 「賣淫女疑遭剋扣八萬肉金報警 警拘集團兩成員」澳門日報、2019年8月26日。

50 「假證租屋助妓女賣淫 操控賣淫案兩逃犯落網」澳門日報、2019年11月7日。

51 「內地男涉操控賣淫被捕 警酒店房截三賣淫女」澳門日報、2020年1月7日。

52 コンプ (comp) とは、コンプリメンタリー (complimentary) を縮めた語で、「無料（もしくは割引）でのもてなし」を意味する。例えば、ある四つ星ホテルでは10000HKDの泥碼を買くと、300HKDを払ったらルーム料金700-800HKDのダブルルームを一泊できる。泥碼（死碼、dead chip）とは、キャッシャーにて現金と引き換えないできない chip のことである。現金かカード支払いで泥碼を買い、コンプ (comp) を利用することができる。

53 「色情單張泛濫 黃少澤：色情概念需社會共識」澳門日報、2018年11月29日。

54 「六旬婦人街頭派發色情單張被捕」澳門日報、2013年7月9日。

うことは決してない。さらに隠蔽性を高めるために、曉琪は街の清掃員を雇うことが多い。道端や歩道橋の下などの場所でものを拾っても周りの人に怪しまれないからである。また、給料は日払いであり、300MOPをピラと共に包んで置く。

次に、曉琪の手下の売春婦の管理について述べる。具体的な数字を明記できないが、現在曉琪は20数人の売春婦を抱えており、少数の香港人を除き、大半は大陸各地からの女性である。香港人の売春婦は曉琪の用意したマカオの賃貸住宅に住んでいるのに対し、大陸人の売春婦は曉琪が常住するホテルの、ある階層にある客室に1人または2人ずつ1部屋で「住んでいる」と言っても、大陸人の売春婦が「仕事」と就寝以外部屋にすることが少なく、繁華街に出かけて待機するか客引きをすることが多い。曉琪は彼女たちと会うことが減多になく、やっかいごとを起こさない限り会わない。

売春婦が初めてマカオに到着した際、曉琪は彼女たちの出身地によって部屋を分配する。出身地の近い人を隣り合わせの部屋または同室にさせ、助け合いをさせ、生活習慣上の違いによる衝突を回避する。普段彼女たちとの連絡手段は電話のみで、複数の番号を持っている曉琪はもちろん、売春婦たちの携帯も「太空卡（タイホンカード）（実名登録なしのSIMカード）」を使って電話番号を頻繁に変えるようにしている<sup>55</sup>。

また、売春婦の生活に曉琪なりの助言をしている。曉琪は彼女たちに「仕事」時間以外に決してギャンブルせず、ドラッグに染まらないようにと伝えるが、監視の手段を持たないため、曉琪はたまに他のカジノで手下の売春婦とぼったり会うこともある。賭博禁止も命令ではないため、曉琪は特に彼女たちを責めないが、ギャンブルによる情緒の不安定を「仕事」に持ち込まないようにとは言っている。過去には、カジノで勝ったことが嬉しくて「仕事」に対して不真面目になったりするものや、負けたことから態度が悪くなり客の響きを買ったものがいたからだという。このよう

に、曉琪による売春婦の生活面の管理はかなり緩いものである。

大陸人の売春婦は週ごとに在留資格の更新をしなければならない。用意すべきものはパスポート、ゴソウトンハンジェン 港澳通行証、トイワントンハンジェン 台湾通行証という3種類の通行証明である。彼女たちの在留資格は「観光」であり、いずれも最大1週間までとなっている。港澳通行証と台湾通行証は2ヶ月を間隔に在留資格の再申請が可能となり、月ごとに交互に使用することが多い。また、パスポートの用途は、第三国への渡航の際に澳門国際空港を出発空港または帰着空港として滞在する際、最大1週間マカオ滞在の資格の証明となる。タイ<sup>56</sup>に到着したら、空港から出ずまた当日の航空便でマカオまで戻る。往路の1週間と復路の1週間を合わせ、2週間もマカオに滞在できるのである。大陸人の売春婦のマカオにおける滞在方法は、図8と図9、二つのパターンにまとめることができる。

このようなパスポートと通行証の交代利用を持って期限最大限までマカオに滞在することができる。売春婦の「出勤スタイル」が2種類あり、曉琪の管理している売春婦たちもどちらかを選択することができる。しかし、珠海市の滞在を休憩とした売春婦は「売上」の良いのみであり、帰底費の返納が厳しい売春婦には珠海市でも「仕事」の機会を探すのである。曉琪は毎月、大陸人の売春婦の入出関<sup>57</sup>の日にちを統一し、タイへの渡航もなるべく同じ航空便にしているのである。書類の更新は複数の人に代行してもらい、闇市において「快速更新」<sup>58</sup>することもできるという。

売春婦たちの「売上」に関して、定額の帰底費を除き、一回の取引額の30%を徴収すると曉琪は言う。曉琪によると、彼女はまた「良心的」な徴収率を設定しているとのことで、他の鶏頭は40%~60%まで徴収する人もいるとのことである。客に自分で場所を用意させるようにと曉琪は毎回売春婦たちに言っているが、どうしても用意できない客には場所代を数百HKD取るようにさせている。曉琪は売春婦たちの毎

55 しかし、太空卡を消滅させるため、2019年12月22日から実施した『网络安全法』（ネット安全法）によって、マカオにおけるSIMカードの購入は実名登録が必須条件となった。実施前に購入したSIMカードも180日間以内に実名登録するように命じられた。その後曉琪と売春婦の間の連絡方法は、曉琪の要請によって本稿では記述しない。

56 第三国のビザの申請費や飛行機のチケット代、地理的距離など総合的に考えて現在タイまで飛ぶことを選択する売春婦が多い。

57 中国では一国二制度（注20参照）により、マカオと香港は「第三国」として見なさず、珠海市とマカオの境界線も「国境」ではなく「フアンゲ 關 關（ボーダーゲート）」と呼ばれる。広東話話者の間でも、ボーダーゲートを通ることを「フエーファン 過 關（関を通る）」とするため、本稿では「入国」「出国」「再入国」といった用語ではなく、「入関」「出関」「再入関」を使うのである。

58 タイのビザ申請は通常、3~5日の営業日が必要となっている（旅行会社経由の場合さらに2日間追加）。しかし、曉琪によると闇市では当日または翌日ビザの発行が完了するようであるが、詳細は不明である。

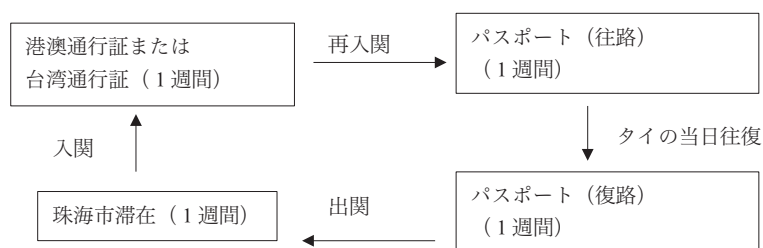


図8 1ヶ月間3週間滞在と1週間休憩（筆者作成）

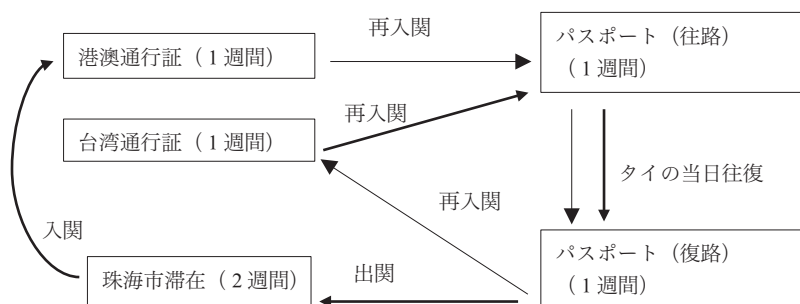


図9 2ヶ月間6週間連続滞在と2週間休憩（太線は4週目から、筆者作成）

月の「売上ノルマ」を設定しておらず、彼女たちの努力次第で収入が変わる。月10万HKD以上稼ぐ人もいれば、1万～2万HKDしか稼げない人もするという。

また、売春婦たちの「働き盛り」は大体20歳～27歳であるが、長期間同じ鶏頭のグループにいと、客の指名が急速に減るため、1年か2年くらい経ったら他の鶏頭のグループに移ることが多いという。そのため、曉琪の手下の売春婦は入れ替わりが非常に激しく、他に数人ほどの鶏頭と売春婦の情報共有をしている。彼女たちは曉琪のグループをやめた後でも曉琪と連絡をとっており、ましてマカオから去って里帰りしたとしてもSNSで連絡を絶たない。特に農村部から出てきた女性は、数年間マカオで性産業に従事しギャンブルやドラッグに染まらず里帰りができると、貯金で5階立ての住居を建てたり、自営業の店を開いたりする。そうした連絡がもたらした時がとても嬉しいと曉琪は語る。「心から彼女たちのことを嬉しく思うよ。数年も罪悪感のある仕事をしたのだから」。

最後に、曉琪とホテル／カジノ側との関係について述べる。ホテル／カジノ側は曉琪の存在を知っており、大目に見るといっても、むしろ協力関係にある。まず、カジノ側として、前述した通り、曉琪の「業務」は性産業のみならず、カジノにおいて洗碼<sup>サイマー</sup>もしており、バカラゲームの売上の引き上げやchip

の回転率の上昇、彼女によるchipの貸出、彼女自身のギャンブルの損得など、カジノに様々な収益をもたらしている。また、ホテル側として、曉琪と売春婦たちの常住と客の宿泊が客室の空室率を下げ、満室状態に近づくほど部屋料金を上げることができ、同じく収益をもたらしているのである。しかし、曉琪のような中規模のグループと違い、少人数のグループは格安の小さな旅館<sup>ローゲン</sup>（宿）にすることが多い。

以上、鶏頭の1人である曉琪の「業務」内容について紹介した。一般的な場合、曉琪のように顔を出す鶏頭は非常に少なく、売春婦との打ち合わせも決して公にすることができない。曉琪の語りはあくまで鶏頭の「業務」の代表例として紹介するのであり、他の鶏頭はより隠蔽的に活動を行うのである。まず、曉琪を中心とした関係は図10のようにまとめることができる。

売春婦になることを希望する女性は、中間人の仲介によってマカオの売春婦になり、管理者である鶏頭を選びその傘下に入る。鶏頭は「業務」が捗るように様々な関係性を持ち、場所の確保や取締の回避のために根回ししている。曉琪は特例であるが、鶏頭は売春婦の管理者としてマカオ性産業における不可欠の存在でありつつ、客や警察にとって「不可視の存在」でもある。その中で、鶏頭と売春婦たちの関係は緩い管理関係にあり、「仕事」内容と常住場所、在留資格の提

59 洗碼 (chip laundering) : 泥碼の同額ベットやchipの仲介を通じてコンプから利益を得ることである。

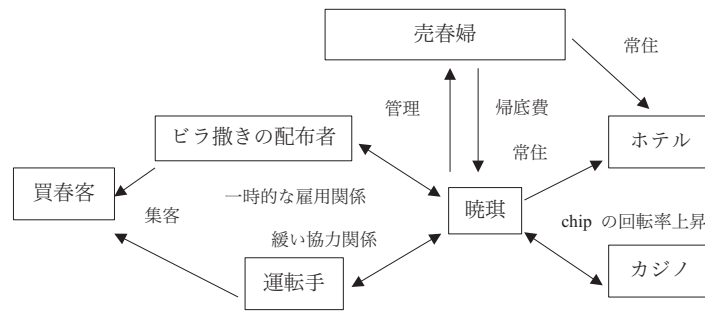


図10 曉琪を中心とした「業務」内容の対象との関係性（筆者作成）

供以外に、売春婦の日常生活を過度に問い詰めたりしない。そのためか、売春婦たちは他の鶏頭のグループに「転職」したり、里帰りしたりしても依然鶏頭と連絡をとっており、親密かつ緩い関係性を保っている。

#### 4 厄祓いの容器としての身体

最後に、マカオ性産業の「主役」である売春婦について述べる。マカオにおける売春婦の数について、観光ビザを持つ人が混ざったり、不法滞在で存在自体が把握されなかったりするため、公式の統計データはないものの、少なくとも数千人は存在すると言われている。本節では、筆者と交友関係を持つ曉琪グループ所属の売春婦の1人である小怡の語りを中心に、マカオの売春婦の身体がマカオの性産業においてどのような意味合いを持っているかについて考察を行う。

小怡は湖南省のとある小さな県出身の21歳の女性である。マカオに来て半年間が経ち、筆者の調査当時、曉琪の帰底費をすでに完納していた。すでに紹介した通り、売春婦は鶏頭と会うことがほぼないが、小怡は、港澳通行証を落としたため電話もせずには曉琪のところへ駆けつけてきた。曉琪は不快な顔をしていたが、小怡は曉琪と話している筆者を見て「こんな若者も（客なの）？」と曉琪に聞いた。すると曉琪は、筆者が日本に留学していることを紹介し、日本のアニメ・漫画文化に熱狂している小怡は、日本語や日本の文化について少しでも話し合いたいということで筆者と連絡を始めた。小怡は曉琪の用意したホテルのある客室に1人で「住んでおり」、所持品には日本のアニメのグッズがたくさんあった。曉琪が用意してくれた部屋であるが、料金は小怡の自費であり、一日あたりの料金は800MOPである。小怡は、自分の帰底費の返納が他の売春婦と比べるとやや早めで、すでに完納したため、稼いだ分を貯金して日本に旅行したいと話す。

小怡は小学一年生の時に親が離婚し、それから父と

ともに生活していた。父が再婚した際、継母の連れ子である弟と生活するようになった。しかし、父が仕事で留守にするたびに、気性が荒い継母は小怡と弟を殴りつけるようになったが、父にはそれを隠してきた。高校進学が許されず、小怡は近くの工場で働き始め、弟が寄宿制の高校に入るための金を貯めた。弟が高校に入った時、19歳になった小怡は、深セン市へと出て日雇いのバイトを探す日々を送るようになった。小怡は労働時間が長く給料が低い仕事に満足できず、ある日マカオの「モデル求人」というネット上の広告を見つけて応募した。最初は怪しいと思ったが、家を出て弟と良い生活を送ると決意した小怡は深く考えず、珠海市まで1人で「面接」を受けに行った。

仕事内容の予想がついていた小怡は、難なく「面接」に通った。売春婦はカジノフロアに出入りしなくて良いものの、21歳の入場制限がかかるカジノと関わる「仕事」であるため、小怡は21歳になるまで珠海市で「仕事」をしていた。マカオに渡航する前に、中間人に複数人の簡単な情報が並べられ、その中の1人を選んで「仕事」をするようにと言われた。すでに「仕事」の経験持ちの小怡は曉琪に気に入られ、良い客室に入れられたようである。

一回の仕事で故郷の工場や深センの日雇いの給料の1週間分以上に稼げるので、彼女はこの「仕事」を気に入った。田舎から出た小怡は、深センでも辺鄙な郊外に泊まっていたため、都会生活を知らなかった。そのため、マカオのリゾート群や今までの倍ぐらいの物価を見た小怡は、都会生活に魅せられていった。何よりマカオでは、大陸にいる時より日本からの輸入品やアニメのグッズを手軽に買うことができ、彼女の好きな日本産のドリンクをスーパーで買い漁ることができるのだ。

また、他の大陸人の売春婦と同様、小怡は一定期間を経るとタイへ飛行機で出国する。半年間の勤務歴なので、まだ往復六回しか飛んでいないが、飛行機に乗

ると面識のある他の売春婦や、若者を中心に売春婦のように見える様々な年齢層の女性を毎回見かけるといふ。これを空中飛鶏<sup>ホンジョンフエイガイ</sup><sup>60</sup>と揶揄するものもいる。当日往復のフライトが非常に疲れると小怡は述べているが、それは不法滞在の売春婦である以上仕方がないと受け入れているようである。小怡は、きっぱりと家族との連絡を断っているが、他の「在籍」売春婦は家族にマカオでモデルの仕事をしていると言うことがあるようである。

次に、小怡の「仕事」内容について紹介する。小怡は普段「仕事」を引き受けるまで、警察に尋問されることを避けるため、他の売春婦とともに外出することなどもせず、目立たない格好でホテルの近くのカフェや自室でアニメを見て時間を潰しながら1人で待機することが多い。夜中に急に「仕事」が来ることも多いため、曉琪から「仕事」の電話が来るまで夜中3、4時まで起きている状態を保つ必要がある。「仕事」の依頼が来たら、すぐに化粧を始め、客と会う準備をする。曉琪は基本、客自身に場所を用意してもらうので、汗で化粧が落ちないようにタクシーを拾って向かうことが多い。

小怡の話によると経験上では客は主に大陸人と香港人の40代～60代の男性ギャンブラーだが、一回だけ日本人の客を受け付けたことがあるという。日にちによって料金が少し異なるが、通貨単位を問わず「一路發發（行く先々財をなし続ける）」という縁起の良い語呂合わせを汲むため、1688を取る人が多い。小怡は夜10時～夜中2時がカジノから出た人が多く、最も客の多い時間帯であると述べた。客に嫌悪感を抱くわけではないが、「仕事」終了後、小怡は直ちに客の顔を忘れるという。

小怡は「仕事」の具体的な内容について言及しないが、客の言動が引かかると話す。日本人客と片言で交流したことは小怡に良い印象を残しており、「一緒に楽しいことをしよう」という言葉をかけられたのを覚えているという。それと比べて大陸人と香港人の客は、一様に不愉快な態度で接してくるので、小怡は自分が悪い存在のように客の目に映ってい

るのではないかと感じるという。これについて、曉琪は彼女の知っている客の「動機」を紹介した。

ギャンブラーはね、言い訳をするのは得意なのよ。ギャンブルに勝っても負けても女の人に「<sup>チョン</sup>沖<sup>イーンヤ</sup>一下（一発ぶつかる）」<sup>61</sup>するのよ。もちろん客の中でエロ目的という人もたくさんいるけど、私が思うに、そっちの方が主な目的とする人が多いわ。ギャンブラー特有の悪質な発想よね。

勝ったらさらに勝つために、少しの不運でも取り祓うし、負けたらなおさらよ。言い訳っぽく聞こえるけどお金の余裕があれば、みんなそうするわ。おかげで客数なんて心配しないわ。そうじゃないとマカオの性産業こんなに繁盛しないのよ。<sup>ガイ</sup>鶏たち、みんなそういう役目だわ（2019年11月2日）。

<sup>チョン</sup>沖とは、中国語において突き破るという意味の他に、不祥事を解消したり、縁起直ししたりするという意味合いも含まれる。そのみならず、猛烈な衝突や、なりふり構わず前に進むなどの意味から、文脈によって女性との性行為を暗示する動詞でもある<sup>62</sup>。今は迷信であると思われるが、明や清の時代において「<sup>チョンシ</sup>沖喜」という行為が多く見られるとされている（夏2019）。<sup>チョンシ</sup>沖喜とは、重病人に結婚式を挙げさせたりなどして縁起直しをすることであり、特に若い女性を重病人の男性と結婚させて健康回復を目的とする行為と見なされていた。

陰陽説の影響が強い中国では、男性は陽に属し、女性は陰に属している。陰陽対立と言われるほど、陰と陽が同格的に見えるが、女性の陰を持って男性の陽を補う<sup>チョンシ</sup>沖喜などから、女性は男性に附属的な位置付けとされていた。それから<sup>チョン</sup>沖の持つ意味が変化を遂げ、現在に至り運勢を改善する意味も含まれるようになった。しかし、<sup>チョン</sup>沖が依然として女性の身体を持って男性に厄祓いの効果があることと同様に、二分法が依然として影響力を持っている現代中国にも、女性との性行為によって男性の不運が取り払われる厄祓いの儀式の一種であると信じる人がいる。

<sup>60</sup> 広東語において空中飛人とは、頻繁に飛行機で各地に出張する人やサーカスの中で空中パフォーマンスをする人など、空を飛ぶ人という広義的な意味を持っている。ここでは、頻繁にマカオとタイの間を飛行機で往復している売春婦たちを揶揄する形であるという比喩がなされている。

<sup>61</sup> 後述するように、厄祓いの目的が含まれる性行為を意味している。

<sup>62</sup> また、四川地方の方言において「<sup>シウチョン</sup>手沖（手で沖をする）」は男性の自慰行為を指しており、現在では「<sup>カイチョン</sup>開沖（沖を開始する）」など、<sup>チョン</sup>沖が男性（時には女性も）の自慰行為を意味するインターネットスラングとしてすでに定着している。

小怡は最初に珠海市で「仕事」をしていた時、客は快樂だけを求めていると思っていた。客を喜ばせるために、献身的かつ奉仕的な行動を取っていた小怡は良い評判をもらい、苦手な客でも楽しい関係性が構築できれば良いと考えていた。しかし、マカオに来てから、その一回きりの日本人との経験を除いて、中国人の客がみな冷めた感じで接してくるのだという。小怡はマカオに来た当時の客たちの印象について以下のように述べた。

マカオに来てからね、出身と関係なく、いつも中国人の客に罵倒されていた。最初は本当にびっくりしたの。ことの最中に、「この悪女め。ぶちこんでやる。こうすれば不運が払われる」と言う。彼らの目つきは怖く、本当に怒りを覚えているように見えたの。「私、何か悪いことでもしたの?」といつも思ってたし、金を稼いでも全然楽しくなれなかった(2019年10月31日)。

2ヶ月くらい経つと、小怡は「仕事」に嫌悪感を持ち始め、やめようとすら思ったが、帰底費の完納までやめられないと曉琪に止められた。小怡は、曉琪に他の先輩と話せばみんな同じであると分かるから気にしなくなるというアドバイスをもらい、他の売春婦と交流を始めた。小怡はその時の心境について以下のように述べた。

最初は本当に戸惑ったけど、他の人と話したらだんだんわかってきたの。私だけじゃないって。売春婦とすれば不運が売春婦に全部持っていかれるの。こう考えれば私の身体ってすごいよね。こんなにもたくさんの不運に堪えられるなんて。

私、あまりこういうのを信じないけど、きっと私が昔どこかで何か悪い事をしたから、親が離婚して、今もこうして不運を溜め込む体質になれるんだよね。他のみんなもそう(2019年10月31日)。

小怡の話によると、彼女と話した他の売春婦も悲惨な背景の持ち主のようである。それ以来、「開き直った」小怡は不運を取り込む身体を活用することになった。例えば「仕事」の際に、「不運を存分にかけてきなさいよ。そうすれば勝てるでしょ」と自ら客に「挑発的」な言葉を投げるようになった。そうすると、小怡の態度を気に入った客が小怡に数百HKDのtipを

くれることもあり、小怡の稼ぎはだんだん増えたのである。さらに、曉琪は小怡のリピーター客がそこそ多くなった理由として、「気持ちよかった」ではなく、「その後ギャンブルで儲けた」ことを挙げる。

現在小怡は、不運を厄祓いできる自分の身体を受け入れることで、マカオにおける売春婦の「仕事」を否定的にとらえることをやめた。客との楽しい関係性を重視する小怡は、珠海市にいた時と別の方法で「身体を受け入れる」ことによって客に対する拒否感が減った。そのみならず、身体を厄祓いする「容器」ととどめず、自ら客の不運を取り祓う役割へと自分を転換した。

このように、マカオの性産業における売春婦の身体の意味合いは、「一般的」な性産業における「快樂が求められる身体」の他に、不運を取り祓う「厄祓いの手段としての身体」も現れる。この効果は、ギャンブル抜きでは語れないカジノシティのマカオにおいて、いっそう顕著に現れてくる。最初はこのような身体を受け入れなかった小怡は、他の売春婦との交流を深める中で、もともと不運な経歴を持つことから、このような不運を取り込む力があると信じ、自分の背景を厄祓いの手段としての身体に帰結した。しかし、小怡自身にはあったことがないものの、他の売春婦が客に暴力を振るわれたりすることもよく耳にするようである。トラウマを持つ他の売春婦は誰も小怡のように自分の厄祓いの手段としての身体を受け入れることができるわけではない。

「身体の変容」を遂げた小怡は、客との関係性にも変化が起きている。客の暴言に耐えられなかった小怡は客と関係を結ぶことを拒んでいたが、不運を取り込む身体として受け入れた後に、積極的に客の不運を取り払おうとする小怡は客に対する拒否感が軽減したのである。しかし、厄祓いの手段としての身体を自ら活用するようになったとはいえ、小怡は単に「陰としての自分」を受け入れたままにとどまり、「陽としての客」に従属する関係性が依然として変わらない「積極的従属」であると思われる。

そして最も重要なのは、小怡のリピーター客が多い理由として、性的快樂を提供したことではなく、ギャンブラーが性行為後の賭け事に勝利したという厄祓いの容器としての効果が高いからであると挙げられた。「性的身体＝厄祓いの容器」と二重的に介在する売春婦の身体は、男性ギャンブラーにとって「誘い込まれる」モノとして数回も指名する一方、売春婦は自ら



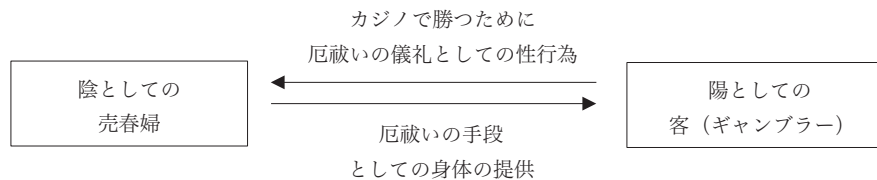


図11 売春婦と客との関係性 (筆者作成)

ギャンブラーを「狩る」ことができず、「性的身体」とされ、身体のみ誘惑の記号として存在する「受動的誘惑」である。売春婦と客との関係性は図11にまとめることができる。

## V 終わりに

### 1 格差という重層的な構造的暴力で生まれるマカオの性産業

本稿は、マカオのカジノにおける「性的」女性であるホステスと売春婦の事例を通して、女性の身体に現れるマカオ社会におけるギャンブルと性の関係性に注目し分析を行った。それぞれ、ホステスと売春婦を取り巻く人々を、一般ギャンブラー、女性ディーラー、<sup>ガイタウ</sup>鶏頭、買春客、ホステスと売春婦自身という様々な対象に分け、それぞれの語りから「性的」女性の「身体の現れ方」を描くことに努めた。

経済の急速な発展を遂げた中国で、ギャンブル好きの大勢の中間層と多数の富裕層をその地の利で一挙に引き受けたマカオは、ラスベガスの総売上を上回りもした。その陰で<sup>ソーフン</sup>沙圏とサウナ業のような性産業も急速な発展を遂げた。マカオのカジノ内においては、アメリカのカクテルウェイトレスのような職種がない代わりに、制服の露出度が低くても「性的存在」の役割を担うホステスが登場した。

I章で検討した売春婦と買春客の関係性をめぐる研究においては、熊田(2017)の「遊び」としての性行為と田川(2019)の「文脈限定的な親密性」が挙げられる。熊田の「おんなのこ」は客に「選ばれ」、客を「遊ばせて」性行為を行う点では、誘惑は客との関係性を確立してからそれを強化する手段である。一方、マカオにおけるホステスは「前提的」に金持ちギャンブラーから金銭をもらっているわけではなく、身体を用いる「誘惑的实践」を通して金持ちギャンブラーを「選び」、金持ちギャンブラーとの間で関係性を築く

「技法」である<sup>63</sup>。そして、田川の「文脈限定的な親密性」は「サービス提供者」と「顧客」の間で関係性の構築を介する金銭が、関係構築の前提的手段として、「平等の関係性」の「疑似恋愛」のもとで隠されている。しかし、本稿で見られるマカオにおける売春婦の身体は、買春客の厄祓いの容器ととらえられる「暴力的関係性」を構築するものであり、関係構築の手段でも目的でもある金銭は、売春婦と買春客(ギャンブラー)との間で暴力性を含む「不平等の関係性」を暴くものであると思われる。

最も重要なのは、本稿で紹介したマカオの性産業は、まさに金銭そのもので生まれる「構造的暴力」を持つものである。熊田と田川の考察において、男性による支配という前提である性産業の構造的暴力は、「遊び」と「疑似恋愛」のもとで見え隠れしている。しかし、本稿で取り上げた事例は、「大陸都会/香港の男性ギャンブラー=富めるもの」と「大陸地方/東南アジアの女性売春婦=貧しいもの」という大きな「金銭的格差」のもとで、「男性ギャンブラーの優位性」のマカオ性産業が形成されたのである。マカオの性産業に従事している女性たちは、このような重層的な構造的暴力のもとで生き、様々な欲望や苦悩を抱えながら、多様な生き方や戦略を模索してきた。

### 2 男性ギャンブラー優位性の構造を改革できなかった誘惑

カジノの女性に関する多くの研究が、女性ギャンブラーのギャンブル行動以外、女性労働者の身体が受けている監視と規制に対する「抵抗の物語」として描かれることはすでに論じた。しかし、マカオのカジノにおける「性的」女性であるホステスと売春婦が、重層的な構造的暴力のもとで模索してきた生き方や戦略は、男性ギャンブラー優位性の構造変革をせず、身体を用いる「誘惑的实践」である。

本稿では主に田中(2018)の議論を参照し、ホステ

<sup>63</sup> 本稿で挙げた宜林のように、気に入らないギャンブラーを他のホステスに任せるという「選択可能」の実践が見られる。

スと売春婦の身体に対して「抵抗の物語」ではなく、「誘惑の物語」という視点を持って彼女たちの身体を取り巻く環境と「身体ストーリー」に注目して事例を検討した。そしてマカオにおけるホステスと売春婦たちが、彼女たち自身の「身体の使い方」と、ギャンブラーとの関係性に関する誘惑を試みる実践を紹介した。

マカオのホステスと売春婦の身体はそれぞれの人にとって、異なる身体の現れ方が見られる。ここでは特に、ホステスと売春婦自身が自分の身体に対するとらえ方について検討する。ホステスは、自分の身体を金持ちギャンブラーとエロスの関係を結ぶための手段として使い、金持ちギャンブラーをエロスの世界に誘い込む方法としている。性行為のような「直接的」なエロスの関係のみならず、身体の延長線とされる声による誘惑も見られる。エロスの世界に入り込んだ金持ちギャンブラーは、ホステスの身体との関係のさらなる深化を図るために、tipを渡したり、より大金を賭けたりするような行為が誘惑に促される。最終的に、ギャンブルと誘惑という二つの行為のスパイラルによって織り交ぜ、金持ちギャンブラーは誘惑の世界に入り込み、ホステスと「誘惑の関係性」を構築した。しかし、このような「誘惑の実践」は田中の「主客の転換」に到達せず、女性劣位の構造変革をするものではなかった。こうしてホステスは、「誘惑の技法」を用いて、身体で金持ちギャンブラーと「能動的誘惑」の関係性を結ぶが、「誘惑の萌芽」に止まるのである。

それに対して、売春婦の身体は重層的な構造的暴力において「厄祓いの容器」とされるものである。「性的身体=厄祓いの容器」と二重的に介在する売春婦の身体は、出会う前に客から「不可視の存在」であり、性行為が可能である記号のみとして客にとらえられている。そして、厄祓いの効果が良いとされる売春婦の身体は、ギャンブラーの数回のリピート行為を通じて「誘惑の身体」として変容を遂げる。しかし、鶏頭の管理下にある売春婦は、自らギャンブラーを「狩る」ことができず、「受動的誘惑」の関係性に止まるのである。このような「厄祓い」の性行為で結ばれる関係性は、「男性ギャンブラーの優位性」という前提に一種の暴力性を含むものとしてとらえられる。しかし、本稿で取り上げた小怡の事例のように、不運を取り込む「厄祓いの身体」という「身体の変容」を経て、身体の主体性が取り入れられる。ところが、この変容は売春婦側にのみ起きるものであり、一部の買春客に暴

力を振るわされるように、買春客が依然として「暴力的関係」としてとらえ、2人でエロスの世界に入らなかったのである。こうして売春婦は、身体の主体性を取り入れた「身体の変容」を遂げたものの、客に対する「従属的關係」は変わらず、ただ「厄祓いする身体」を引き受けることを通して、自分の役割と相手との関係性に自分なりの折り合いをつけている。

このように、本稿で検討した事例は、田中(2018)の主張した誘惑論と些細なズレが生じることが見られる。ホステスに関しては、能動的誘惑の実践を通して「誘惑の萌芽」が見受けられたが、売春婦に関して男性ギャンブラーを能動的に誘惑する資格さえ持っていない。しかし、田中(2018)は身体を用いた性的誘惑の他に、「モノの誘惑」としてフェティシズム論を展開した(田中 2018: 118-144)。本稿で考察を行った売春婦の身体は、買春客(ギャンブラー)にとって「性的身体=厄祓いの容器」という二重的なモノの記号性を帯びていることがわかった。買春客からみれば、色<sup>スエチエンダンジョン</sup>情<sup>ガイタク</sup>單張や鶏頭との交渉における売春婦の情報は、身体を持つ不可視の存在とされる上で、性行為においても売春婦と共にエロスの世界に入り込むことは少なく、あくまで厄祓いの「容器」としてとらえているのである。身体は誘惑するはずだった対象において、金銭という「前提的暴力」のもとで「モノ化」された売春婦は、自ら「厄祓いの身体」という役割を引き受けたとしても、田川の「文脈限定的な親密性」も見られず、往々にして売春婦の誘惑の試みの失敗につながる。しかし同時に、買春客(ギャンブラー)は厄祓いの効果によって、「モノ化」された売春婦の身体でも、何度も誘い込まれる「受動的誘惑」が起きる。そのため、売春婦の身体は「モノ化」されてフェティシズムと似ている「受動的誘惑」の性質を持っていると言えよう。本稿で挙げた「性的」女性たちは、田中の誘惑論を用いて表4のように細分することができる。

いまだに男性ギャンブラー優位のマカオのカジノ業において、「性的」女性の存在は不可欠であるといっても過言ではない。本稿で検討したマカオの「性的」女性たちの身体は、男性ギャンブラー優位に対しての抵抗の実践ではなく、「誘惑の物語」とも言える「身体ストーリー」が見られる。他にも、ギャンブルの不確実性に抗する身体の偶発性と異なる中国思想における「陰としての女性」が見受けられる。しかし、ホステスも売春婦も依然として重層的な構造的暴力のもと

表4 本稿で挙げた「性的」女性たちにおける誘惑の性質の違い

能動的誘惑		受動的誘惑			
能動的誘惑		手段/戦略としての誘惑		受動的誘惑	
ホステス	身体を持って客を「狩る」／「選ぶ」関係性の開始	「おんなのこ」(熊田)	客に「選ばれ」てから関係性を深めるための戦略	売春婦	厄祓いの容器と「モノ化」された身体「暴力的」関係性
遊弋女 <sup>64</sup>		JKTVの「サービス提供者」(田川)		サウナの店員	
		夜総会の女公関		マッサージ屋の「整体師」	

(筆者作成)

で生き、男性ギャンブラー優位性の構造を攪乱する田中の「成功の誘惑」に至らなかった。田中の誘惑論は、構造の攪乱に至る「成功の誘惑」を示しているが、誘惑の性質による細分と「成功の条件」を検討する余地が残っていると思われる。

本稿は、マカオのカジノの内外における「性的」女性であるホステスと売春婦をめぐって、誘惑と厄祓いとされる彼女たちの身体は男性ギャンブラーにとっての表象がいかなる意味を含むか、という問題意識の下で彼女たちを取り巻く語りと実践を対象とする考察を行った。しかしながら、本稿は小規模のカジノ所属のホステスと鶏頭グループ所属の売春婦の事例を取り上げて展開されるモノである。マカオにおける「性的」女性の全体的実態をよりよく理解するために、大規模のカジノ所属のホステスやサウナの店員、マッサージ屋の「整体師」、そして金持ちギャンブラーと買春客における他の事例を考察し、ホステスと売春婦間の差異に目を向け、男性ギャンブラー優位という構造的暴力の主体の視点を持って、マカオにおける売春婦と買春客の関係性の考察を補足することが課題として残る。また、既存の身体論に関する文化人類学的研究の中で、どのような理論的貢献が可能かについての検討は、今後の課題としたい。

### 参考文献

(日本語文献)

江原 由美子

- 2008 「性の商品化」『ジェンダーの社会学入門』江原由美子、山田昌弘(著)、pp.132-141、岩波書店。

大川 潤、佐伯 英隆

- 2011 『カジノの文化誌』中央公論新社。

熊田 陽子

- 2017 『性風俗世界を生きる「おんなのこ」のエスノグラフィ——SM・関係性・「自己」がつむぐもの』明石書店。

SWASH(編)

- 2018 『セックスワーク・スタディーズ——当事者視点で考える性と労働』日本評論社。

田川 夢乃

- 2019 『「私のお客さん」と築く親密性——フィリピン、M市のカラオケパブの事例から』『コンタクト・ゾーン』11:95-121。

田中 雅一

- 2018 『誘惑する文化人類学——コンタクト・ゾーンの世界へ』世界思想社。

ホックシールド、アーリー・ラッセル

- 2000 『管理される心——感情が商品になるとき』石川准・室伏亜希(訳)、世界思想社(Hochschild, Arlie R. 1983 *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. Berkeley: University of California Press.)。

吉田 雄介

- 2003 「書評 モーラル・エコノミーから基底政治へ——ジェームズ・C・スコットの著作から」『史泉』98:51-56。

(英語文献)

Afifi, Tracie O., Cox, Brian J., Martens, Patricia J., Sareen, Jitender., Enns, Murray W.

- 2010 The Relation Between Types and Frequency of Gambling Activities and Problem Gambling Among Women in Canada, *The Canadian Journal of Psychiatry*

64 身体を持って買春客を「狩る」点として、この表では遊弋女をホステスと同様に「能動的誘惑」に分類しているが、買春客(ギャンブラー)との性行為や関係性における遊弋女の身体は、本稿で挙げた売春婦の「性的身体=厄祓いの容器」と同じとらえられ方である。しかし、鶏頭の管理下にある売春婦と異なり、連絡先を交換しない遊弋女との性行為は往々にして一過性であり、買春客(ギャンブラー)のリポートが極めて難しい。遊弋女と買春客の関係性はホステスと金持ちギャンブラーのように親密ではないものの、遊弋女における「受動的誘惑」がさほど見られないため、この表では「能動的誘惑」に分類するのである。

55(1): 21–28.

Bayard de Volo, Lorraine

2003 Service and Surveillance: Infrapolitics at Work among Casino Cocktail Waitresses, *Social Politics: International Studies in Gender, State & Society* 10(3): 346–376.

Jones, Jill B., Chandler, Susan

2007 Surveillance and Regulation: Control of Women Casino Workers' Bodies, *Affilia: Journal of Women and Social Work* 22(2): 150–162.

LaPlante, Debi A., Nelson, Sarah E., LaBrie, Richard A., Shaffer, Howard

2006 Men & Women Playing Games: Gender and the Gambling Preferences of Iowa Gambling Treatment Program Participants, *Journal of Gambling Studies* 22(1): 65–80.

Sassen, Saskia

2004 Going Beyond the National State in the USA: The Politics of Minoritized Groups in Global Cities, *Diogenes* 203: 59–65.

Scott, James C.

1990 *Domination and the Arts of Resistance*. New Haven, CT: Yale University Press.

Tarras, John., Singh, A.J., Moufakkir, Omar

2000 The Profile and Motivations of Elderly Women Gamblers, *Gaming Research & Review Journal* 5(1): 33–46.

Walker, Gordon J., Hinch, Thomas D., Weighill, A. J.

2005 Inter- and Intra-Gender Similarities and Differences in Motivations for Casino Gambling, *Leisure Sciences* 27(2): 111–130.

(中国語文献)

陳 偉明

2018 「明清澳門內地移民的發展類型與人口構成」『明清時期澳門華人社會研究論文集』林廣志、陳文源(編)、pp. 2–32、澳門基金會。

史 默

2010 「澳門色情業話今昔」『九鼎』35: 20–22。

吳 志良、湯 開建、金 國平(編)

2009 『澳門編年史——第四卷』廣東人民出版社。

夏 薇

2019 「薛宝釵與“冲喜”——明清小說中女性的日常生活」『紅樓夢學刊』1: 102–125。

(新聞)

「六旬婦人街頭派發色情單張被捕」澳門日報、2013年7月9日。

「九內地女涉民居經營非法按摩帶查」澳門日報、2018年3月1日。

「色情單張泛濫 黃少澤：色情概念需社會共識」澳門日報、2018年11月29日。

「越籍按摩女盜室友三萬二輸光法辦」澳門日報、2018年12月28日。

「警搗沙梨頭非旅截十色情按摩女」澳門日報、2019年4月9日。

「賣淫女疑遭剋扣八萬肉金報警 警拘集團兩成員」澳門日報、2019年8月26日。

「假證租屋助妓女賣淫 操控賣淫案兩逃犯落網」澳門日報、2019年11月7日。

「治安警反罪惡巡查截兩色情按摩女」澳門日報、2019年12月10日。

「內地男涉嫌控賣淫被捕 警酒店房截三賣淫女」澳門日報、2020年1月7日。

「按摩女運值76萬毒郵包與過夜客齊落網」澳門日報、2020年5月26日。

(インターネット資料)

澳門特別行政區博彩監察協調局 HP

<http://www.dicj.gov.mo/web/cn/information/index.html> (最終アクセス2020年9月12日)

澳門特別行政區政府統計暨普查局 HP データベース

<https://www.dsec.gov.mo/zh-MO/Statistic/Database> (最終アクセス2020年9月12日)

澳門特別行政區政府印務局 HP

[https://bo.io.gov.mo/bo/i/97/30/lei06\\_cn.asp](https://bo.io.gov.mo/bo/i/97/30/lei06_cn.asp) (最終アクセス2020年9月12日)

(オンライン記事)

「澳門沒有一夜情」每日頭條、2019年3月13日

<https://kknews.cc/entertainment/ejlpmmq.html> (最終アクセス2020年9月13日)

「爽爆：澳門夜總會式微 舞國風華褪色」方東青、蘋果日報、2012年10月31日

<https://hk.appledaily.com/local/20121031/3CDR6BGWQXG5QWXRSMB3QI57VM/> (最終アクセス2020年9月13日)

「【沙圈再現】氹仔淪為國際『交流』中心 性感女主動搭訕：去你的房」澳門力報、2018年11月25日

<https://www.exmoo.com/article/87591.html> (最終アクセス2020年9月13日)

---

## Bodies of Seduction and Exorcism: About “Sexual” Women Inside and Outside Macau Casinos

Zhenye LIU\*

In this paper, we consider hostesses and sex workers, who are recognized as being “sexual” women, inside and outside Macau’s casinos, as a case study of their bodies as seduction and exorcism in their “life strategies.” Inside the casino, the job of the hostess is to attract wealthy gamblers and increase repeat business at the casino, while the role of sex workers outside the casino is to be a “vessel” to ward off bad luck in gambling. Their bodies are considered by the Macau people to be “sexual” in the male gambler-dominated Macau casino industry. In contrast, existing research is primarily concerned with the practice of resistance to casino surveillance and regulations imposed on female casino employees in the U.S. casinos and it lacks a perspective that practice is different depending on the body of a woman’s body, who is considered “sexual.”

We have observed certain aspects of the actual situation of “sexual” women in Macau through fieldwork in Macau for one year from August 2018. In existing studies and newspaper articles, their bodies are overly characterized as “sexual” and are, therefore, often excluded from studies and reporting. However, in Macau’s casino industry, which is being developed by many male gamblers, since the reference to their “sexual body” has two connotations, one for sexual pleasure and the other for exorcism, these women are indispensable for attracting more customers.

This paper describes hostesses’ and sex workers’ practices and examines the need for such a “sexual” body. To that end, this paper refers to Tanaka’s (2018) theory of seduction to analyze the “sexual” body from the perspective of seduction. The unique features of seduction include the conversion of subject and object, the contingency of the body, and the fusion of self and others. By using hostesses and sex workers in Macau as case studies, we can understand the actual situation of “sexual” women and can depict them as a “story of resistance” by examining their bodies, apart from the women’s problem. The purpose of this paper is to clarify the state of Macau society and to provide the possibility of Seduction Ethnography by discovering its significance as a “story of seduction.”

### Keywords

seduction, female, sexual body, Macau, casino

---

\* Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University